



本朝文鑑
首之一

5
4709
1



5
4709
1

一階
學

東
朝
又
鑑

大正



獅子番巻還稿



選本の文鑑序

昔より此の書連記の旨ありて此の書も文章あれ
連記も文章あり文章を此の旨としりありぬを
此も文章の旨としりありて此の書も文章あれ
此も文章ありて和漢の文章人もかくも此の書
よして此の旨としりありぬを
此も文章ありて此の書も文章あれ
此も文章ありて此の書も文章あれ
此も文章ありて此の書も文章あれ
此も文章ありて此の書も文章あれ

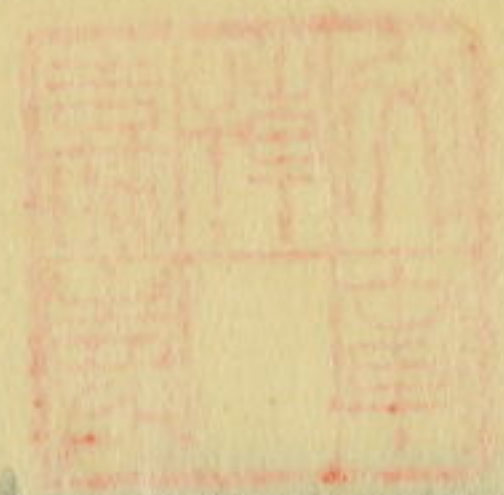


連二の序

昭和九年
三月二日
十四日
春日
長尾友房
の
書
贈
り

大田盛一

能讀く邑進ありてはく古人とらわらうし又うそ
 んの川ありてくくくく人の場々々々自在あり
 先ト上ト下ト人トの二ト下ト下ト里とあれとあはれと連
 るト文章の字格とさうとさうとつとつと字のあはれ
 ては中後良のわらうとほとつと連字をさうとつと文格
 ともつとつと今や能讀の文法はくくく邑進のさ
 びらりちてつとつと連能の次とさうら凡賦雅頌の所
 とはさあわらうと和漢の文法はくくく情のゆらりとあはれ
 ありそら其内ト文字のなとさうとさうの藩^{カキ}とさうひ
 くの室ト入つとつとつとつと一脈とせくくくあはれはあ



くくく河内ト作意とさうとつとつとつと能讀ありは
 つとつとくく西ト東華坊は法格とつとつと三章
 名鑑ありとつとつとつとつとつと假名のつとつと
 辞の類とあつとつとつと五七の訣路とつとつとや法
 百世の字とつとつとつと文章の法とつとつと文はと格と
 中とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 下ト代の裏とつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 扱子とつとつと王侯のつとつとつとつとつとつとつと
 の差とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

五人のふとりて誠家のふと新文あはれり
ふと七人のふとあはれり海道のふとあはれり
海道のふとあはれり海道のふとあはれり
常永乙南の比あはれり湖東の五老井ふとあはれり
凡俗又選とあはれりあはれりあはれり
ふとあはれり二とあはれりあはれりあはれり
あはれり仇誹の意地とあはれりあはれり
敵とあはれりあはれりあはれりあはれり
あはれりあはれりあはれりあはれりあはれり
あはれりあはれりあはれりあはれりあはれり

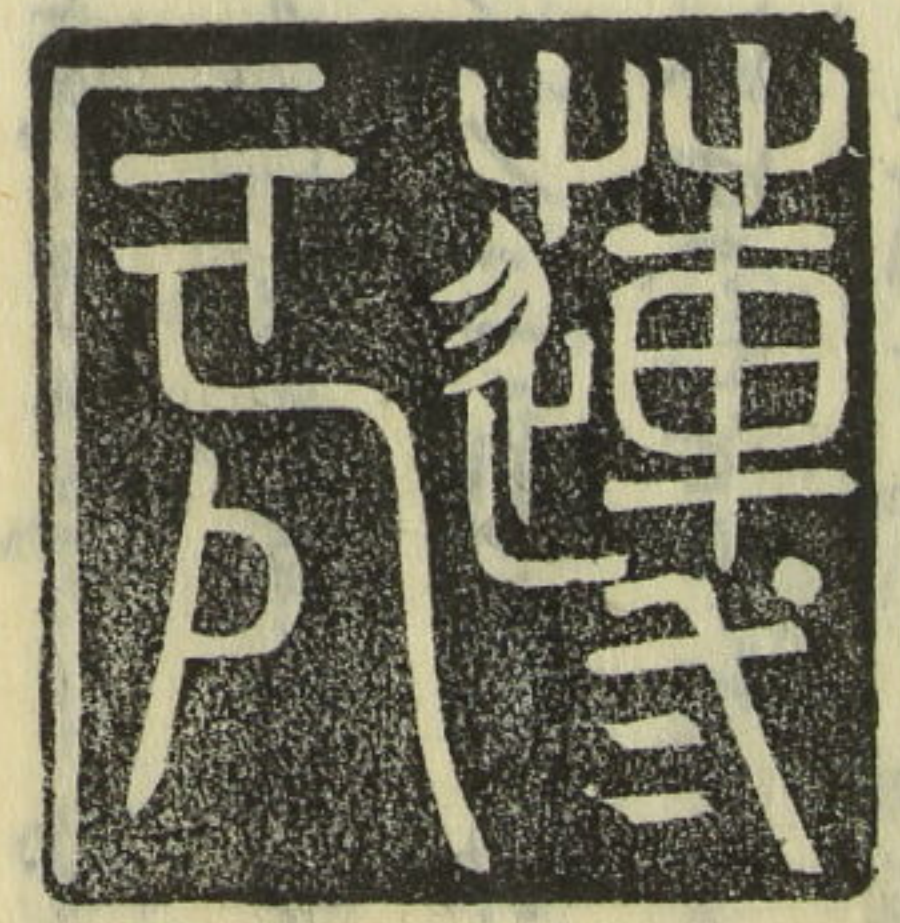
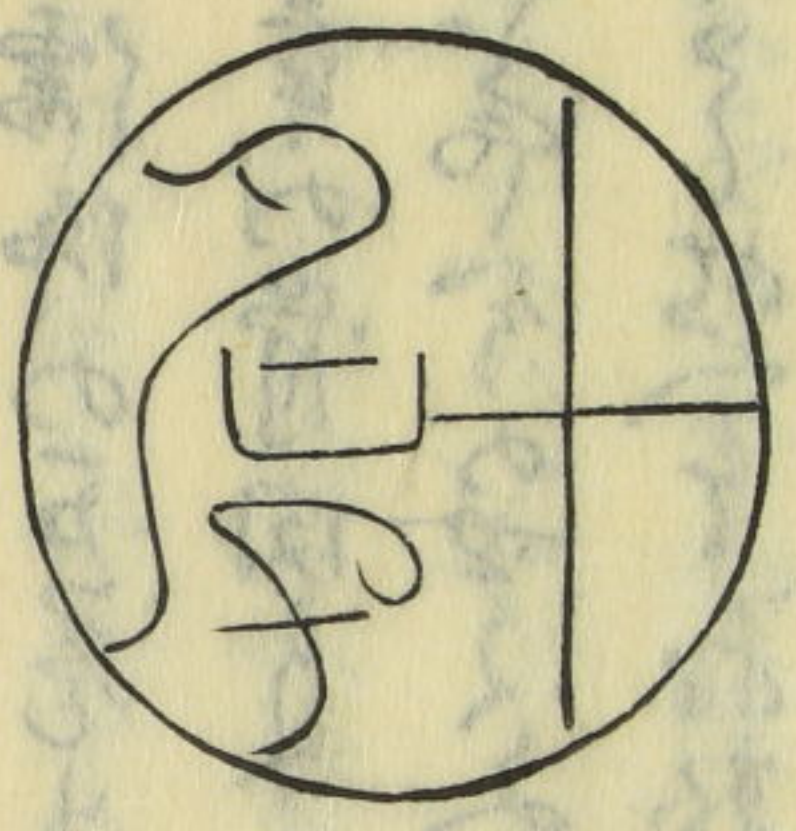
五ヶ條の法と書して文章の家の式同さふとあはれり
ふと文章の虚實とあはれり一教書詔状の序論あはれり
ふとふと文章の起結とあはれり一や備の断後あはれり
あはれりあはれりあはれりあはれりあはれり
の法とあはれりあはれりあはれりあはれり
配とあはれり一序文とあはれりあはれりあはれり
ふとふと文章の字格とあはれりあはれりあはれり
あはれりあはれりあはれりあはれりあはれり
あはれりあはれりあはれりあはれりあはれり
あはれりあはれりあはれりあはれりあはれり
あはれりあはれりあはれりあはれりあはれり

新文の字は格と云つて下地しを令くを七十金と
 云ふは我輩の餘力ありしかく遺誡にされば
 多うかのう運二う碑目と机右の選一かけ白ね眼
 と燈下の註ありつて本約又鑑の口子と題と
 転し我々の奇類とありつて次は燈下家の奇類
 と云ふは梁武帝の文選より一帝王朝臣の
 事し工商農士のや一おもきこと一瀾王の廳の事
 然るより一くこの文は一ては新ありと云はれ
 又章の中西士の事と賢の居と事よはれと云ふは
 中と云うけ鬼神の心と感と一ありはるは虚實の一

偶より一にして五ヶ條の第一と云ふは言語より一
 の物一て儒師の二カ巻しつて益と云ふは一第一
 才と云ふ文章の骨肉一て才の中五と云ふは皮毛
 ありしはと云ふ今の世も文章と云ふは一氣血骨動の
 骨肉と云ふは一皮毛と云ふは皮毛と云ふは
 一て才一の虚實より一自在あり何と云ふ文章の
 一い何と云ふ文章の情一と一何のなはれと云ふは
 一と云ふは浮言閑語より一凡雅と云ふは一罪と
 一はし先師のて六一種と説てこれらの悔ありん
 一と我輩のちのひより一ありんと一實永の幸知と

一書の志とくくひ一享深の丁商一牛の功とくく
ちる也

惟千惟支子是秋日



註の又鑑序

渡部狂

後に。我師のつゝあり。此一句ハ發端ニシテ後ニト
ハ發語ナリ然レハ此序ニハ

論語ニ述ニ而篇ノ辞義トモ見レシ能讀モトクハ度々亦ニ
おもひて。此一句ヲ起語ト云イテ

あゝと巧言と云ふ。此二句ヲ結語ト云イテ或ハ讀トモ云ナリ
總テ起結ト句讀トハ同ニ高ニ似テ

サシ述クアリ此序ニ句讀ノ点ヲ加フル故ニ起ナリ結ナリトナリ云イテ
句讀ヲコトハラス去レト句中ノ句アリ句中ノ讀アリ讀中ノ讀モナリ

一但し句点ハ響ニ
アリ讀点ハ中ニアリ此雨の林是身也我やと云ふは。我

とて我耳也老やと云ふん。此二句ハ起語ト結語トナリ
但し四面ノ林是身ト林是國

ノ元ル時ナレハ佛語感ノ声ニ喩ナリ老ヤシヌラト
ハ佛語ノ意ヲ知レハ己ラシテテ今ヲトカメナルノ謂ナリ
返辭ニ云

万物ノ生レバ異滅ありテ。此句ハ起語ニシテ
四相ハ世々變ナリ大ある時ハ

百却入るる。おさ時を一念ニかきする。此二句ハ同じ結語
ナカラフノ句ニ

連續セリ世等ニ句讀角
ヲ知レシ季曲ハ世次ニ註アリ

此二句ハ讀中ノ讀ナリ而却一年一月一時ト前ニ續キ又ハ前
ノ二句ハ大少ノ二ヲ云イテ後ノ二句ニ其中ヲ云ハル是ヲ錯綜顛倒ノ法ト云

テ大中ヲカキニセタナリ世々常
ト四下子ノ轉義又ニシテ然ナラシムるに。じし此佛語ハ。上ハ返ス
辭ニナ

次ハ起語ナレハ何レモ句ノ意ナキニ或ハ發語ト起語トキ或ハ返辭ト起語
トツク時ハ總ニ二字ニ字ノ向ナレハ同じト云ハルヤカニキ故ニ上ニ三句ト云

加ヘ下ニ讀点ヲ加フ是ハ註者ノ心得ニシテ傳文
ノ巨ノ故實トモ云ハル以下ハ總テ世ニ巨ニ效フレシ守武宗鑑ナリ

せ行へ。檀林のぬくま滅しぬ。此二句ハ起語ナリ
檀林ノ後ハ維摩

ノ空因ヨリ變動シテ其
後ハ長短ノ句ニ滅セリ

此二句ハ變滅ノ物ヲ結語ニシテ
古代ノ佛語ノ四相ヲ云ナリ

終焉のえんとてありテ。此二句ヲ句中ノ讀ト云レシタリ
新續ト云古アリテ世ノ文ニ云キニ

此二句ハヤズナリ世新續ヲ知ラハ長句ニ自
ツキ所ナレハ句ニ二句トナレハ殊ニ大切ノ句讀ナリ

右此の佛の言
トヒユム水ノ清トハ故云明ニ正風ノ始ニシテ世ニモキタル各句ナレハ強動山山世
ノ佛語ニ喩フ如来一三句演説法ヲ衆生隨類各得解ストハ天下ノ

内人ノ様々ニナレタルヲ云ヘリ故ノ一ナリニハ
内流ノ分レラズナリ世々變動ノ四ヲ含ナリ

時ときくとも。おのびのちかちかほはしん。此二句ハ讀中ノ讀ニシテ是モ
大切ノ句法ナリ右池や蛙

此二句ハ起語ナリ句中ニ讀アルニ似タレトモ春其冬ノニキナラキニ云セ
テ二句ニ云ハル意ハ二句ニシテ起語ナリ去レハ佛語ノ正風ハカ物ヲウカラ

時ときくとも。おのびのちかちかほはしん。

此二句ハ起語ナリ句中ニ讀アルニ似タレトモ春其冬ノニキナラキニ云セ
テ二句ニ云ハル意ハ二句ニシテ起語ナリ去レハ佛語ノ正風ハカ物ヲウカラ

此二句ハ起語ナリ句中ニ讀アルニ似タレトモ春其冬ノニキナラキニ云セ
テ二句ニ云ハル意ハ二句ニシテ起語ナリ去レハ佛語ノ正風ハカ物ヲウカラ

此二句ハ起語ナリ句中ニ讀アルニ似タレトモ春其冬ノニキナラキニ云セ
テ二句ニ云ハル意ハ二句ニシテ起語ナリ去レハ佛語ノ正風ハカ物ヲウカラ

其所ヲ失ハスト詩奇
正道ヲ花鳥ニ云リ 秋と秋と云ふは藤の又部と云ふ
て。ア。序の末ニ云ふは後もたふなり。 此三句ハ結語ト
モリユレト云リノ

此句ヲ起語トシテ進言ノ句ヲ結語ト見レシ總テ此四句ヲ數里各
互見ノ法ト云ナリ之句ノ間ニ四季ヲ云ル故ニ其冬ノニ子ヲ數里各
レテ春秋ノニ子ニ互見セリ或ハ前ノ二句ハ花鳥ヲ對シ是ラ句對
ノ法ニシテ意對トハ遠クアリ或ハ此二句ハ知花ノ其トナリ鳥ノ冬トナ

雪ノニ子ニ隔タレハ雲玉ニ夢ノ格トモ云キカ或ハ秋ノ句ト春ノ句ト
知花ヲ隔テ字對スレハ是ラハ隔對ノ法ト云フ總テハ錯綜トモリユ
レト四季ヲ之句ニ云フ時ハ互見ノ方ニ定リ又然レハ此四句ハ種々ノ
文法アリテ之句ヲ起語トシ一ニ句ヲ結語トスレハ古今ニ致レキ句

法ニシテ之ヲ文ニ章ノ數舞ト云ナリ去レハ結句ノ邊トハ故語
ノ正風ハ四季ノ自然ヨリ出テ花鳥ノ情ニ私ナラシハ凡雅感
像モ盛ニト俊成
ノ奇ヲ情テ云リ 奇ノ行もるもる二十余年なり。新

奇とありたり。奇ノ行もるもる二十余年なり。新

此二句ハ起語ナカラ
前ノ一句ヨリ二句ヲ

此二句ハ古今ノ俳論ノ惣結語ナリ但シ二十
余年ノ句ヲ起語トシテ減云十年ノ句ヲ

減云十年

減云十年

減云十年

減云十年

減云十年

減云十年

枕詞の要とつゝあつてあつた。此二句の起下結三句の脚

と昆園の玉と看過して。故宮の瓦とあつて人

あつて。此二句の意對なり文字の配りハ對せし玉ト瓦トノ意對也故

味ハレ聲言ハ社律ノ野老河魚モ二句ニ意ノ對ニシテ

於てとつてあつて。此一段ハ枕詞ノ詞ヲ返シテ此序ノ

又草ヲ讀ミテ序詞ハ是ニテノ意ナリ去ハレ段ニハ句讀ノ意多シ上ノ詞ヲ

人ヲ推ルト云々ナリ。後ハ枕詞のつゝあつて。此句ハ前二

ナハ発語モ発端モ同じケレト前ニハ解語ノ枕詞ヲ云々

とあつてあつて。世ハ文章とあつてあつて。此二句ハ

讀ミテ或ハ枕詞ハつゝ。韓愈のあつてあつて。句讀ハ

法叙セルナリ本ヨリ韓愈之カ所説ニ句讀ハ五重ノ義ニ云レト枕詞ノ

又右ノ其レヲ知ラサルハ假名ニ詞ヲ長短アル故ナリ聲言ハ候ニ明ニ云フ

マキラカト四字ニヨリ。つゝ。及とほつて或はとつてあつて。

此句ハ先師ノ詞ノ結語ナラヤトノ押字ニ序者ノ詞トハ枕詞ヨリ

もかくつてあつてあつて。此二句ハ前ノ詞ヲ借テ

了や。枕詞ヲ枕詞ト云フハ前ノ二句ヲ枕詞ニシメルト云々ナリ或ハト

其時ハ二句ノ角ヲヤシカクナリ作レシ去トモ文字ノ長短ヲ入レテ

讀ミテ法做所ヲ知レ但レト。枕詞の文章とあつてあつて。

此句ハ起語ニテ誠ニハ決辭ナリ去レハ決辭ト云フ付ハ上ニ三ノ詞アリテ下ニ
二句アル付ハ何レ詞ニテモ句五ヲ加フレ但シ百ノ付ハ下ニ三ノ句讀ノ句ハ
ナクテモ言カラス此句ハ 一應押復用の長短ともあふ。數量

充教のふまよと對と。此二句ハ結語ナリ但シ應押之教ナリハ
用ヲ云一リ然レテ長短之々ノ様ヲ對セル等ヲ子對心符トスレシ
むモ杜詩ノ對ナリ態子ハ大ニリニテ數量充教ハ幸々對セルナリ

こふよと何れもいふ又轉ナリ。此二句ハ下ノ句ニテキタレ
ト是ヲ句中ノ讀トレ

一但シ本朝又轉トハ其等ノ文之等ニモ似タラシト云フ假名直名各ノ
通用ヲ云ルナリ去レハ我師之文章ハ大ニ和漢ノ通用ニテ例ノ遺稿ニモ

文賦ナト其外ニ四五等倫モ假名直名トニ各キタレ物アリ去レハ右ノ語
ノ假名ト直名ハ通ニテ決ナリ別ナリ去レハ一巨ノキタレトモ漢文之等

ト遠ハス然モ此ニテ 白承天也此とあり。此句ハ上ニ結
然モ佛語ナリ故ニ此詞ナリ

上ノ物結語ナリ去レハ右ノ天ト直名ハ唐ニモ文者ハ多ク下日本ニモ
リテ詩多ク論ニテハ我師ノ通用ニ我ヲ折ラシト三捕ヲ佛語各ナリ

歌人のふまよ。此句ハ上ハ起語ニテ下ハ起語
ナト下句讀ノ句ハ前ノ註ナリ

かゝるのふまよはあふ。此二句ハ一ノ句ニテ讀中ノ讀ナリ是ヲモ
語路ノ斷續ト知レシ前ニ宛奉ノ句ハ

向中ノ讀ニテ受トハサレ漢イナリ句讀ハ此等ニ通ラズレ誠ニ此二句ハ半介使
ナレハ向中ニ結ナリ所ナキナリナリナリ

ハ長句ヲカレ又格ニシテ 漢字ノあふハナリ。此二句ハ
此序ニ句讀ノ備ナリ

レテ前ノ長句ヲカケテ短語トセヨリけ句モ二句ノ語ナリナラ長句ノ
扱子ニテ前ノ二句ヲ結ス此等ニ長短ノ法ヲ味レシ總テハ長々短々トナラフ

中ニ長短入レナカレ 此等ノ字格トナレ。此二句ハ起
ハ文者ノ備キト云レ

ノ字ハ起語ナカラ 假名直名ト云レ。此二句ハ結語ナリ此句ハ假名直名ナリ
或ハ起語モ有レ

假名直名ト云レ。此二句ハ結語ナリ此句ハ假名直名ナリ
直名ニシテ假名ナリト和漢ニ通用ノ自

在ラ云シト一轉シテ此ノ如ク云一リ在子カ 倭國ト云レハ倭國
筆法ニ數多アリ是ハ錯綜シテ顛倒セバ倭國ト云レハ倭國

筆法ニ數多アリ是ハ錯綜シテ顛倒セバ倭國ト云レハ倭國

筆法ニ數多アリ是ハ錯綜シテ顛倒セバ倭國ト云レハ倭國

筆法ニ數多アリ是ハ錯綜シテ顛倒セバ倭國ト云レハ倭國

筆法ニ數多アリ是ハ錯綜シテ顛倒セバ倭國ト云レハ倭國

筆法ニ數多アリ是ハ錯綜シテ顛倒セバ倭國ト云レハ倭國

筆法ニ數多アリ是ハ錯綜シテ顛倒セバ倭國ト云レハ倭國

筆法ニ數多アリ是ハ錯綜シテ顛倒セバ倭國ト云レハ倭國

の風あはんと。河の唐人の衣又真寶あはんと。此二句ハ起結ナリ

ラチハ句中ノ讀トモ云ハシ是モ体ノ格ナラシ然レニ古文直寶上ハ日本ナリ俗語ニ初四ニカキイ男ヲ云ハ今ハ傳テ未ダ君ノキシラシクテ笑アリ

一人連号の風あ。商人能語の寛活あ。此二句ハ起結ナリ

此故下ハ返辭ナリ然レハ多ク人連号ト云フ詩人能語ト云テ一箇ノ人ナラ上下ニ用ク兩箇ノ師ナラ響カセタル是ヲみ聞ノ法ト云イテ五短ノ法ニ似テ遠クアリ

此詞ハ返辭ナリ此ヤモ是ト同レ返辭遠クハ前ニ註ス武乃くあはんと

此上ノ句ハ起結ニシテ吾ク又章ノ人ヲ云ヘリ此ハ詩ノ連解ハくも。分論ニシテ士農工商ノ中ニ武乃ト云ハ八文武ト兩角ニ云タル

故ニ況ヤト次辭ヲ置テ塵囂ノ珍客ヲ云ルナリ是モ數者ノ類テ文法ノ自在此の道の運社あはんと

下。此と云運の字後と云ふこと。此二句ハ起結ナリ

下二段ノ起結語ナリ但レ此二句ノ向ニハ何トク一詞入キニ是ハ中里者ノ法ニシテ上下ノ二句ニ喜ヲ合シテ去レハ多ク運社トハ運ニラ意ニ遠ク法師ニ

喩テ上ノ句ノ倒明ヲカキ下ト博字ノ謝靈運ヲ入ル心ナリ去レハ文ニテ下ノ句ニ運社ト云フ

ノ塵囂ト云フニ筆接ハ起結ノ時ノ後人ニテ或ハ倒文トモ云ヘリ又筆ノ在ノ人ノ後ナリ此運モ其後ニ切タレテたナリノ字ナリト例ノ塵囂又

ニ不向在ニテ諷刺ヲ起シテ終ニ誅也然レハ註者ノ自在モ判解過當ヲ西ニテ運ヤ如ク思

シテト一節ノ註ノ會釈ナリ此の道の運社あはんと

と仰。運ニ云と見。又鑑いし註者ん

此二句ハ起結ナキヲカキ去レトモタラシト此詞の過當と云

下ノ句ニ運社ト云ハ但レ向中ノ讀法ニシト師兄の因心いしん

此二句ハ起結ナリ然レハ此二句ニ此詞ヲ教辭ト

用ニテ去レト前ノ句ニハナラ置テハ上ニウク教辭ナリ此等此の序

此詞ハ返辭ト起結ナリ向讀ノ二句ハ別ニ註セリ去レハ多ク此の序

此詞ハ返辭ト起結ナリ向讀ノ二句ハ別ニ註セリ去レハ多ク此の序

此詞ハ返辭ト起結ナリ向讀ノ二句ハ別ニ註セリ去レハ多ク此の序

此詞ハ返辭ト起結ナリ向讀ノ二句ハ別ニ註セリ去レハ多ク此の序

ト打捨テ當然ノ用ヲ次ニ云ハナリ但シハトハカハ起結の註とあつ
ルノ書語ニテ渾天ニ任他ト答テサモアラハズナリ起結の註とあつ
と云。句讀の点と云々。此二句ハ起語ナリ然レニ此句ヲ
起結ノ註ヲアラシメ句讀点

ヲ添ヘタトハナリ云キニ上ニテ下ニハナリトノ手合波ヲ置スルハ上ノテ
クニニ自ラツキテ語路ノウカ又タメナリ然ラナクハ此二句ハ一句ニモ句讀
ニ句ニモ句讀ナリ此故ニ下ノ句ニモ無用ノハナリト直スルナリ此二句ノ論ヲ
知ラハ助語ノ用無用ヲ兼ニ知リ語路ノ断續ヲ兼ニ知リ彼名真名ノ配ヲ
兼ニ知リテ句讀
ノ点ハトモニ明カニ云ク一初め凡例ト云カハ柳と云ト云ハ

ハ奥ニ教多ク又テ序同ノ向ニ各出シテ一所ニ増テ明シラ云ハ八效之ノ
ニ字ハ凡例ノ筆法ニシテ一初ノ文法句格ヨリ句讀長短ノ差別ナト
此序ノ註ニテ又ハ外證ニモ凡例ノニ字アリ但シ此註凡例ト云ハ
一初ノモ此序ニハ四條ノ文法アリナカレ條ノ句格アルハ先ハ此序ヲ看ス
ニテ句讀長短ニ和漢ノ差別アルト文法句格ノ似テ似ナルヲ知ラハ文鑑ニモ
兼ニ明カニ古今ノ文章モ兼ニ明カト云

或曰漢ニ句讀ノ法ト云フハ語ノ絶へ又処ヲ讀ト云イ語ノ絶ル処ヲ
句ト云イテ讀ヲ先ニ中ニ点シ句ヲ後ニ旁ニ点ス然レハ句讀
ハ一意ニノ句中ニ讀ヲ分タリト見エ譬ハ春ハ野山ノ雪消ヘ
テノ鶯ノ声モ和ラカニ。如此兩点シテ足ラ句ト云イ此句
墨シテ一五甲ト云リ尤モ此点ハ秘書省校書ノ式ニノ漢文ハ
總テ此法ナリ去レ氏倭文ニ考レハ句直地ニ其事ヲ言放シ讀
分明ニ其理ヲ訓解スト見レハ句点ヲ先ニ讀点ヲ後ニ句讀
ハ但シニ意匠云カ譬ハ春ハ野山ノ雪消ヘテ鶯ノ声モ和
カニ。柳ノ色モ濃ヤカナリ。如此三点シテ一句ニ讀ト云フ時ハ或ハ
二句ニ讀アラシモ或ハ句五讀アラシモ句中ノ句ト云イ讀中ノ讀

ト云イ或ハ句中ノ讀圧云イテ讀息ノ終リヲ一句ト見ルヘシ去ハ漢文ノ讀ト句トヲ合テ一停ノ処ヲ一句ト云ハモ倭文ノ句ト讀トヲ合セテ一停ノ処ヲ一句ト云シモ總ニ先後ノ違イノミナト漢文ハ讀ヲ先ヲ中間ニ点スル中ニ在ル点ハ中絶ノ意ニテ其所ヲ句絶トヤ云ヘキ字書ニ讀字ノ註解ト按書ノ点式トハ取り違アルヤ倭文ハ句ヲ先ニテ^{カクハラ}点セハ語ノ絶ヘ^ルト知リ讀ヲ後ニ中間ニ点セハ語ノ絶ル印ト知ラン但シ中間ニ点ハ連續シテ旁点ハ断絶ト云ル点式ノ道理モアル事ヤ今ハ和漢ノ差別ヲ論スルハむモ後勘ナカラシヤ法ハ知リヤスキ方ニ隨フヘシ但シ此序ニ云ル^{カクハラ}発語ト起語トニ点ハ同ク方ニ点スヘシ註キ時終レヤラン

文法

序文 発端 発語 起語 結語
 返辞 决辞 釘辞 歎辞 括辞
 語路 助語 押字 抱字 句頭
 枕詞 句拍子
 句讀 長短 語路 斷續
 句格

數畧互見 結前生後 錯綜顛倒
 奪胎換骨 無心所着 上中下畧
 雲土夢 長短句 蟋蟀 鳥鼠

小韻考

七

互照 倒格衣 藏頭 藏尾 能文句
 有尾 文對 意對 句對 字對
 隔對 隔句 田字語 墨字 變態
 本注 頓挫 函云 隱見

石四十餘條アリテ文法トハ一篇ノ法式ヲ云ク句格トハ句ノ格例ヲ云一但シ和漢ノ兩用ナリ或ハ本傳胎摺骨ト古人ノ文章ノ致ヲ備テ意ハ各別ナラズ云ク或ハ雲土或ハ連綿ノ語ヲ分ケテ文ニ撰様ヲ附ルラ云フ辭言ハ月花面白ト云フ月ハ面ニ花ハ白ト云ハシカ知レ書ハ經ヨリ出タル文格ナリ或ハ蝶蜂トハ先ニ云キ古又ラ後ニ其ノ名ヲ顯セルナリ詩經ノ七月ニ此格アリ或ハ白鳥氣ハ編幅ニ物ノ何方ニ毛紡ルハ古又ナリ或ハ雙雙圓ハ一物ヲ以テ上下ノ儔アル古又ナリ其ノ餘ハ字面ノ訓解ニ知レシモ毛每字備ニ法格アラシモ一字備ノ下ニ註解アラハ且ツ外ハ其ノ字備ニ效レシ

題註

歌 水川詩式ニ永言ヲ謂之歌也
 詩 詩經序人心之感物而致言
 賦 陸機文賦 体物而瀏亮
 行 詩人玉屑 体如行書 且行
 吟 文選註 吟痛詠也詩人玉屑
 曲 詩人玉屑 体如行書 且行
 引 文選註 大畧如序而櫛
 謠 詩人玉屑 通於俚俗 曰謠
 辭 古文行式 寄情深而語後

箴 詩經註 以礫刺病也
 論 文式論 宜曲折深遠也
 傳 文式論 宜曲折深遠也
 記 文式論 宜曲折深遠也
 辨 文式論 宜曲折深遠也
 頌 文式論 宜曲折深遠也
 贊 文式論 宜曲折深遠也

本目

銘 礼記 註曰 敬言我之辭 曰銘也
紀名 註銘其功也

表 又選本註表 明也 禮也 如物之標 或曰
顯 政也 曰表 陳也 曰表 表也

教令 授也 亦曰令 告戒也 亦曰
教也 亦曰令 告戒也 亦曰

書狀 約會 書 亦曰書 亦曰書 亦曰書
狀 猶言 亦曰書 亦曰書 亦曰書

序跋 說文 序 東西 禮也 禮也 禮也
禮也 禮也 禮也 禮也 禮也

對向 說文 對 應 也 也 也 也 也
說文 對 應 也 也 也 也 也

日記 說文 日 記 往 來 也 紀 也 記 也
說文 日 記 往 來 也 紀 也 記 也

碑文 說文 碑 石 也 紀 功 德 也 亦 曰 碑
說文 碑 石 也 紀 功 德 也 亦 曰 碑

弔文 文選 弔 為 弔 弔 弔 弔 弔
文選 弔 為 弔 弔 弔 弔 弔

此三行。又五字ノ題名ハ黒白ニ明ナラス大慨ハ似タル物多シ然レハ
和漢ノ文五字片ニ首尾ノ文言ニ心得アラシカ既ニ文選ニハ
弔屈原ノ文トアルニ右文後佳ホハ賦類ニ入レ滕王閣序
モ或本ニハ記類ニ入レタリ然ラハ漢文ノ字者トテモ分明
ナラヌトハ見タリ去レト文鑑ノ論ニ云ハコ屈原賦ハ元々
弔文ナルケル滕王閣序ハ記トモ云ケレト末ニ到リテハ賦ト
云ハシカ爾ニ序ノ字ハ如何ナラン但シ此類ニ序ノ字ヲ用ケル滕王
閣ニ遊フトカ會スルト云レシ是ハ其書ニ詩アルヨリ不實ニ序ノ
ヲ置ケルナラン等ニ選者ノ好惡ヲ知レハナリ本ヨリ又五字ノ題
名ハ諸抄ニ其註ハ明ナレト一字ノ上ヲ註シテ字面ノ似タル物
ハ分明ナラスハ故ニ其名ノ紛ラハシキ合セテ多ニ註解セリ
モ其題ノ似テ似サル古又ハ字義ト字訓ニ歩千里ナラン總テハ

二十金題ナランヲ多クニ七題ヲ挙ケテ不似ト相似トノ差別ヲ
 註スルニ漢文ノ筋ハ殊ニ知ラス俚文ハ多クニ分明ナラシカ
 或ハ詩ト歌ハ凡雅ノ才トスル物ニテ法格ハ本ヨリ嚴重ナリ然レハ
 文選下トノ部ニモ歌行曲吟ノ類ヨリ引モ辭モ詩類ノ中ニ
 散在セリ何レモ此各ノ詩ヨリ出テ詩ヨリモ變化所ヲ知ルル也
 詩歌ノ兩題ハ多クニ細註スルニ及ハス

或ハ歌ト行モ无ハ相似ス物ト知ルル詩人玉屑モ相兼テ歌行ト云
 トアリ去レト氷川詩式ニハ言フ水シ情ヲ放チテナクハ法格ヲ定メス
 氏見ルハ或ハ長短ノ句拍子ナラシカ但シ此類中尚ハ石見ナト
 云ル短語アリテ樂府ノ常語ナリト註セリ詩ヨリモ法度ヲ有キ
 ヌレハ俚文ニハ俚モアラン本ヨリ和音ハ註スルニ及ハス
 或ハ賦ト記トモ相似スレト賦ハ當節ノ物ヲ各節ヘテ文法ニ以テ

記ハ往古ノ起リヲ記シテ文法ハ實体ナルレ但シ賦ハ叶韻ノ法モアラン
 或ハ辭ト云フ時ハ詩ト騷トノ声ヲカキテニ俚ニ歌フレトモ俚文
 ノ辭ヲルルニ何ニテモ其古又ヲ序シ其事ニ辭アリテ必ス叶韻ノ法ヲ
 用エ先ハ古人ノ漢文ニ隨フレ去レト書籍ノ論ニヨラス平話ニ辭ト云フ
 時ハ俚文ノ一休モ有ラシカト我内ニ談論アリ後ハ俗辭ニ見ルレ誠ニ
 漢土ハ文字固ニシテ我朝ハキ本皮ノ固ナレハ辭トハ助詔ノ者又ニテ唐ヨリ
 モ日本ハ詞ノ微情ヲ尽セリ然ラハ辭ノ俚ハ後助ルキ古又ナラレ但レ
 字書ニ辭トモ辭トモ俗字語子ノ論アレト又鑑ハ總テ讀マスキニ
 隨フ是ヨリ以下ノ子論トモモ一子ニ效レシ

或ハ曲ト云フハ委曲ニ情ヲ尽スレト註シタレト何ノ文ニキテカ席相
 ニ合テ委細ニ情ヲ尽スレシキ曲字ノ註ニハ不審ナリ俚ニ俗順
 カ曲調モアリテ先ハ平世ニ近キ物ナリむモ和音ニハ固曲ト云フ

ハ曲ヲ附ルト云フニ拍子ヲ拍子ヨリ十二拍子ト定テ向脱ト云フハ拍子
 十ニ長短ニ長短ノ句法トモ等ノ唱ニ等ニ知ルキカ
 或ハ吟ト云フ時ハ物ヲ感スル所ヨリ文ニ子ニ沉思ノ姿アリテ我ト物思
 致息ノ露音ナシハ虫聲ノ註ニ吟ト字ヲ尽セリ後ニ白頭吟モ後ニ
 負女吟モ文法ハ但シ歌行ノ類ナラン
 或ハ謡トハ世間ノ風俗ニ等シテ里中ノ謡ヲススニ或ハ歌トモ書
 ナル所ハ歌ハ琴ノ唱ニ等ト見レハ萬事早ノ只モ明ナリ和号ハ各別
 或ハ引トモ序トハ長短ノ差別ト註シタレト序ト引ハ各別ノ事アリ強
 テ序引ノ差別ヲ云ハハ序ハ詩ヲ支ニシテ何ノ詩ヲ序ト云イ
 引ハ詩ヲ後ニシテ何ノ引ヲ支ニシト云ハ但シ引字ハ誘引句引ノ
 事ニテ詩ヲノ余情ヲ誘イ出ス心ナラン既ニ文体明辨ニモ引トハ
 君ヨリ以後ノ題各ニテ引ト各ルノ美分明ナラスト希ハ引類トニ註ス

或ハ論ト解トハ各別ノ類ナラフ論スレハ解スル理アリテ尺目立テ見
 レハ其文ハ紛ルナリ去レト論ハ元々テ相對スル物ヲ論シ解ハ天子
 一物ノ理ヲ解ス論ハ悉ク物ヲムツカレウ云イカテ曲折深ニ
 論スレハ解シテモ其レヲ論スル古ナリ
 或ハ説ト辨トハ物ノ理非ヲ一合シテ明辨ニ説カレ所ハ相似タレト
 説ハ虚誑ノ理ヲ以テ人ノ心ヲ感動シ辨ハ實有ノ理ヲ演テ其
 古更ラ辨別スレハ説辨ニ様ハ各別ナリ後更ニ虚實ノ取違アリ
 或ハ記ト銘トモ相似タレト記ハ其古更ヲ記シ銘ハ其古更ヲ銘スト
 云レシ況ヤ銘ハ簡約ニシテ文ニ法アリト註シタレハ多クハ序詞アリ
 銘アラシハ記トハ各別ノ所アリ但シ紀ト記ハ同シ
 或ハ傳ト記トモ相似タレト人ノ起リヲ傳ト云イ物ノ起リヲ記ト云イ
 此等ノ道理ヲ故實トハ云ナリ或ハ傳記モ傳類ニ入ルニ

或ハ坊ノト頌トモ似タル所アレト云言ハ似テ趣ハ異ナリ頌ハ口物ノ形容ヲ
頌シ班々ハ大方ハ人口ヲ替スス云々其通理ハナケレト世々モ
故毎々ト知ルキナリ但シ誦讀ノモトモ通用ナリ

或ハ尺書表類トシテ君父ニ奉ル尺書モ仏神ニ捧ル尺書モ願文ナト
總テ此類ニ入ルレ尺書表ハ上ニ奉リ書状ハ下ニ解レ或ハ同此率ニ
贈答スル題ハ紛ル物ナレ但シ誦讀文モ祈言願ノ詞アラシハ

或ハ書状類ニ申状返書ハ勿論ニシテ移文悞狀ナトヲ入ルレ
但シ移文トハ本朝ノ題文ナリ

或ハ教令類ト題シテ皇室教ノ類ハ勿論ナリ或ハ寺社ノ制札
ヲ入ルレ教ハ安堵ノ教書ニシテ令ハ王后ノ令命ナリ

或ハ對向トハ文章ヲ先ニシ理諭ヲ後ニト云レ向者ハ向ヲ設ケ對者
ハ對ヲ設ケテ文法ニ鼓舞舞ヲ尺ス辟言ハ雅陳ハ理諭ヲ先ニシテ

對向ハ理諭ヲ後ニト知ルレ本朝文粹ハ對冊トナリ

或ハ日記類ト題シテ行状終季ノ二記ヲ入ルレ或ハ紀行ト云時ハ
日記ノ中ニ入ルキナリ總テ記類トハ各別ナリ

或ハ碑文類ニハ碑銘墓誌ナトヲ入ルレ總テ此類ハ序アリテ其銘
其誌ナトアルレ心王墓誌ノ論ハ碑文類ノ下ニナリ

或ハ帛文類ニハ多手文帛文ナト記誦文ヲモ言スレ但シ此類ハ死期
ノ哀傷ヲ演ヘテ指シテ法格ニカハラシカスレハ碑文類ナトニ異ナリ

テ條文ノ自由ヲナサナリ此等ニ和漢ノ差別ヲミテ文章ニ私ナカシ
或ハ詩ト云イ系ト云イ冊ト云イ啓ト云イ策向ト云イ彈右又ト云イ

皆以テ條文ノ各ニアラヌ本ヨリ條文ニ候語ヲ用ユル時モ文字ノ各ヨリ
其の類ニ心得ルレ此等ヲ文鑑ノ筆格トセリ況ヤ系人系道ノ

各ヲマ但シ設論ハ對向ノ類ナカラ論類ニモ接スレ文記述ノ各難

實録ナトハ増シテ能諾多ク格ナシク然ルニ連珠類ト云アリ其名ハ
題名ノ類ニアラテ文格ノ中ニ入ルキニヤ
或ハ文類碑類ナト古文後集ニ題シタト文ハ詩賦ノ物名ニ
既ニ陸核モ文賦ヲ目テ詩銘説論ハ其中ニ在リ鳥文花文
ナト一字ハナシタル題名ハアルニ北山後文ハ撤書ノ類ナシ古戰場
文モ甲文ノ類ナリ去レト文選ノ策文ヲ文類ト題シタル如何ナル故
ニヤ知ラス或ハ碑類モ如何ナシ碑トハ木石ノ名ナレハ碑銘トテ碑文トナ
有レシト等ニ選者ノ鍊石鍊アルハ文ニ古文ノ之属有ラモ云ナリ誠ニ
古人ノ詞ニモ悉ク書ヲ信セストハ錯ヲ以テ錯ニ看ク故ナリ

目録

第一卷

歌類

天文歌 伊弉諾 地理歌 伊弉冊 人和歌 下照姫

南朝歌 柿本人麿 連奇 源賴朝 誹諧奇 貫之張

求韻奇 高市万呂卿 題志也 芭蕉庵 七種奇 東華坊

字訓奇 秋之坊 念佛歌 雲居和尙 長恨歌返奇 權大夫惟冬

詩類

四季花鳥 未老老仙 獅子庵三詠 和漢堂花 左

和漢堂月 左 道途遊 蓮三席 花鳥詩有感 渡部狂

秋思 僧自如

十月梅 二行堂

微情 從織

官六之

山中尋酒 得巴弓

碓坊 上支 石依卷

寄雪 戀 石過角

所思 文石

見月 戲作 各東羽

野菊 以北片

送越 友明 渡吾仲 蠅 昨裏

管 伊東想 行路難 渡石範

○第二卷

賦類

硯賦 北手吟

既望賦 豆蔴庵

涼賦 渡吾仲

將棊賦 東華坊

讀將棊賦 村野航

日和山賦 岸昨裏

悠然賦 種乙子

好色賦 善好法師

行類

水波行 岸昨裏

一歲行 華表人

吟類

雨夜吟 依弓文

曲類

於曲 作者不知 田舎曲 今 東曲 生仰坊

舞子曲 東老坊

○第一卷

引類

富士引 山部赤人

羊羽引 東老坊

和合錄

詩類

雨乞謠 盤珪和尚

石搗謠 信主仁平

辭類

風俗辭 渡部狂山院辭 休和齋

艷詞 某成部 戲師辭 烏丸光廣

情捨子辭 芭蕉庵

夕暮辭 某坊

烏追詞 作者不知

歲類

雨居歲 芭蕉庵

猶戀歲

大已靜

○第四卷

表類

十一

告天滿宮文 袖室園 印起清遊寺

報恩表 車安寺坊

教令類

雙林寺修石碑教 渡部狂

二落柿舍制札 向五末

書狀類

答浦冠者狀 藤賴朝

法文 蓮聖人返狀 源中坊

酒成並移文 播佐渡入道

贈左雲老人書 某坊

二洛書 今川了俊 申白和狀 蓮二房

○第五卷

論類

大國大盛

博學論 東華坊

博知論 西華坊

解類

念佛解法然上人九品解是仰序 養生主解

東華坊

地黃之製解 狷左角

傳類

五子傳 西行法師

應六坊傳 各馬改

白狂傳 東華坊

記類

松記 俗真室

白鷗堂記 本林百九

獅子庵記 東華坊

往來記 江北坊

六卷亭記 西華坊

○第六卷

序跋類

其什序 崑雪 東山二句序 兼堂 卜居序 白驢居二

觀音之遷座序 東華坊 二弟合序 蓮二序

千句跋 蓋木田守武 啼鴉集跋 蓮二序

對向類

花鳥對 東華坊 影法師對 櫻木因

○第七卷

辯類

居眠辨趙北枝 挑化辨蓮二房 伯兔辨東花坊 自得辨北七里

梅長者辨井童平 巴与與杖辨東花坊 招童辨相在角

說類

飽上人說東山長嘯 各小坊主說 應浪化樗商人說 木字中

各說便部狂名 二子說木路寫助 論師說西花坊

後語說曾呂利 江談美說 露五印無衛

頌類

蕎麥切頌 二竹堂 右利須磨頌 木林百凡

酌德頌高九蚌 松茸頌 川宣三次

○第八卷

贊類

淨土和讚親善聖人 幸兜波七町 扶貝 芭蕉庵

六玉川前贊 僧大竹 六玉川後贊 向去菜 我花讚 依系伍

苦馬帝贊 鉅碧川 負讚烏落人 負讚讚東華坊

致柱自讚 吾其角 讚徒然一讚 江北房

銘類

花桶銘離立南 摺小本銘藤如行 箸柄銘 西華坊

旅硯銘相在角 古硯銘東花坊 盆銘 僧上草

林泉文鑑

二十

○第九卷

日記類

芭蕉云雨終年記 吾身庵

庚午紀行 四維坊

自造終年日記 東華坊

碑文類

芭蕉云雨石碑銘 東華坊

圖司墓誌 野盤子

弔文類

生身魂祭文 北七里

弔許文 渡部狂

提綱

一 呂氏ト又音ラ見ル法ニモケ條アリオニ見ニ主張ヲオニ見ル
 規模ヲオニ見ニ細目關鍵ヲオニ見ニ主意有尾相應
 才五ニ見ニ鋪序次第ヲオニ見ニ抑揚停表段ヲオニ見ニ計策
 之句法ト云リ去ルハ選ノエケ條ニ擬ルニ口申カオハ趣意
 之ニシテオニ又法句格ナラシ然レハオニハ起結ラユイオニハ
 ハ虚實ラユル其余ノニ條ハ則ラ合セテニ室テ委延ニユル
 ナラシ誠ニ虚實ヨリ起結長短ニテノニ條ハ和澤通用ノ文オ
 ニシテ假名有各名ノ配リハ倭文ノ式ト云ニク俳諧ノ筆格ハ我
 ノオト云ニ此故ニ和澤ノ文法ヲ合セテ提綱ノ始ニハ云リ
 此書ノ部ニ歌類ヲ首トスルハ本朝文體ト云ル大意ニテ詩ハ

本朝文體

其ノ対セリ和漢ノ通用ヲ顯セリ然レハ才ニ賦類ハ和漢ノ文佳キノ先トスル物ヲ賦ハ文章ノ全態ニシテ其金ハ皮毛骨肉或ハ吟行曲引ノ類ハ大ニ詩類ニ加フケハ暫ク賦類ヲ隔ツトイトモ本ヨリ詩騷ノ類ト知レシ或ハ其次ニ辭類ハ所謂ル詩騷ノ要ヨリ出テ凡雅ト俗談ト向ナル物トハ又又文鑑ノ一格ラユレハ其類ハ十八題ノ各ラ交テ大概ハ文選ノ部ニニ效ヘリ

世書ハ古今ノ文佳キナカラ飾語ノ作者ヲ主トシテ歌人連テ師ラ客タラシハ毎ニ編ニ我々ノ子モ世理ニシテ文鑑ノ子モ世理アラシカ然レニ我内ノ文章ノ世選ニ數多クハ所謂ル世選ヲ奉ルニ題コトニ其レカは格ヲ出シ他ノ文章ノ足ラナル所ハ強テ數篇ノ各ラ出セル誠ニ難スク誠ニ恐ルレ増シテ作者ノ尊卑ヲ分ケサルハ題ノ二テ才アレハ居ノ文選モ世故ナシ

本朝ノ文章ニ軍書物語トハ文法句格モ有ナカラ句讀ノ三短ニカハラス偏ニ其古又ノ埒ヲ明ル物ナレハ文佳キノ筆格トハ違イアリ辭言ハ源中秘衣トト八雷日大家カ筆法ニモ效イテ史記漢書ヲ意トナセル物語ト文佳キハ世等ノ互別ニ知ナキ世書ニ源中秘衣ノ類ヨリ文章ヲ裁入テ私ニ題各ラ加ヘタルハ楚辭ノ漁父篇ヲ採テ辭ノ一字ヲ加ヘタル例ナリ但シ絶讃ノ筆格ニ近キ物ヲ選ニテ世文佳キノ飾トハナセリ

文章ニ韻ヲ用ル古又ハ才ニ四声七音ヲ知レシ四声ハ平上去入ナリ七音ハ唇舌牙止齒喉ニ平齒手舌ラ加フ或ハ沈中ウ四声韻譜ニ平上入者表而平上声者扇而平去声者清而上入声者直而促ト云ヘリ或ハ説文ニ韻ハ和也諧也平出為声成文為言高實為韻トモ總テ世等ノ

註ラ合ロテ声ノ音韻ノ差別ハ明ナレト倭國ノ久ノ漢文ニ用ルルハ
 字面ノ道理ノミヲ知テ詔路ノ音律ニ通セラルホトハ聲言本朝
 ニ文官ニ品江仲ノ如キ人モ漢土ノ叶韻ハ覚束ナレ去ル漢家ノ
 文章ノ韻モ或ハ有リ或ハ有ラスレテ兎角ニ漢語ノ音律ニ通セ
 ラハ漢文ノ沙汰ハ推量ナリ然ルニ本朝ノ和音ノ中ニ或ハ韻字ヲ
 用ケルニ倭國ノアカカハ分明ニレテ今ノ文鑑ニモ叶韻ノ法アリ
 五レハ本朝ノ韻法ニ聲言ハ月ト云イ雪ト云イテ次ニ面ハキト云イ
 悲シキト云フ付ハキノ字ハ同字別吟ニレテ同韻ニ用ケルニヤ古クノ
 韻法ニモ此格ノ見ユハ漢ニ逸ト逸トノ為用ノ類ナシ然ラサレハ
 假名ノ叶韻ハアケラエラノ五音ナセラ總ニナセシテ不自由ナラシ
 去レト春ノユキト平假名ニハ春ケレト秋ノフキトハ春カタレ其等
 ハ假名ノ心得ニ入レシルソトイフ子ハ音書ニモ假名ハ辨ナレ

ト或ハタヒトトナフツキト假名ニツケテハ用捨モ有ラカキヨリ假名ノ韻
 法トテモ四声トセラレノ通韻ヲ知レハ一韻ナキトモ六九ノス韻鏡通明
 ノ人ニ尋又レ通韻ノ古又ハミズニ尽レ難レ或ハ長吟節ノ詩モ音行ノ
 類モ換韻ノ体トナフ付ハ同韻ニ同字ヲ用ケル古ノ人ノ文法ニ其格
 アリ但レ韻ヲ隔フレシ或ハ音尾ノ韻トナフ付ハ漢文トハ遠クアリ
 聲言ハ二句ニ韻ヲ用ケ四句ニ韻ヲ用ケ三句四句ニ情ヲ尽シカキニハ
 其間ニ四句ニモ三句ニモ韻ヲ用ケ然レハ中向ノ句ハ云イ捨テレ故リ總テ
 世ノ漢字不字ノ論ニアラス通不通ノ詮ヲナリ或ハ假名ニ平仄ノ
 論モ委ニク詩類ノ序詞ニ見合ハレシ
 一
 文章ニ助語ノ古ノ人向才一ノ要文ニテ漢ニ之キ者也ノ四助アレハ
 係ニ手余遠波ノ四助アリ然レハ和漢ニ世ノ字ヲ以テ貴賤差カノ
 口ヲモ令テル係ニ手余遠波ハ明ナレトモ漢ニ之キ者也ハ明ナラズ

去ルハ此等事矣トノ即子ノ音律ニ通セラル故ナリ也故ニ漢文ヲ讀ム時ハ有ルヨリ通キテ讀ヤスレ者ヤ倭文ニ手余波テカラシハ孩兒ノ物云フニ聖ヲラレ聲言一倭人ノ漢文ヲ各テ即子韻子ヲ用イタルモ唐人ノ言語ニ通セラルハ如何ニ博學ノ文者トテモ是ハ決シテ信用シカタクニ漢ニ盡ル武カ助語辭アルモ其子ノ訓解ハ明ナトモ外ニ向テ用ル時ハ一字モ自己ノ用ニ立ス倭ニ曝露藏カ用字格アルモ博ク古人ノ文格ヲ見覺ヘテ其子ノ訓解ハ明ナトモ外ニ向テ用ル時ハ一字モ自己ノ用ニ立ス然ラハ西書ノ詮要ハ吾ノ音律ニ通シテノ後ナラン此等事矣ノ其外モ二十余自々ノ助語ニ通セスシテ我朝ノ漢文ハ大キニ覺束ナレ去レト隣ノ莫知トカ知レル倭文ハ面白ラス知又漢文ニ骨折ルハ和漢ニ人情ノ常ナカニ漢文ノ人ニ恥シキ良ナリ然ラハ我朝ノ文章ニテハ助語ト云フ令ルノ

助語ト云イテ一字ヲ讀ム時ハ句ノ鑿ト云イテ一字ヲ誦フ時ハ合韻トモ句ノ手トモ云フ詔路ノ断ル時ノ助音ナレハ誰カ我朝ノ助語ヲ知ラズ然レハ漢文ノ此等事矣モ本朝ノ手余波ニラハラシハ漢文ニ通スハカキ重モ知リ漢音ニ通セカハ大儒モ知ラス知不知ハハハハハヤ去レト漢文モ各子ハナラ又用アルハ先ハ唐人ニ交リテ唐音ヲ覺一次ハ唐人ノ文者ニ逢テ夷俗ニ風俗ノ詞ヲ習イテ余自々ノ助字ヲ知りテ其後ニ漢文ヲ見キナリ也等ノ語ヲ知ラズ人ノ我ハ漢文ヲ得たりト思フハ文章ノ道理ヲ知ラヌ方ニ落レシ先ハ本朝ノ文ヲ知ルナリ

一文章ニ假名有ス各ノ配トハ才ハ作者ノ心得ニシテ才ニハ筆者ノ機轉ナリ去レハ先師ノ文賦ニモ五ヶ條ヲ叙スルトテ野數ニ啼テハ管野ノフキ隱ナラスト誠ニ漢文ハ上ニ返リテ管野數ニ教ト連続セリ然レハ倭文ノ配トハ管野數ニ啼トハトニ

勅字ノ入用ヲ知ルレシ譬之ニ用ノ手余波トテモ假名ト貞名トノ間
 三置レシ此故ニ文跡ハ假名ト貞名トノ兩用ナリ次ニ筆者ノ様式
 トハ譬言ハ月雲面也トモ花時鳥魚ト有テトモ貞名ノ訓言ニテ
 續キタルハ但シ筆者ノ不様轉ナリ昔シ故云羽ノ幻住庵ノ記ニ
 云急ハ三枝足東南ニ馳セトアルヲ云雷也三枝足ト合テハ子ヲ席
 シタルハ才シニハ技者ノ不字ト云レシ此等ハ五ヶ條ノ皮モト云レト
 倭文ニ云ハ骨節ナランカ

一陸士衝カ文賦ニ文ハ知ルノ難キニ非ス又ハ能スルノ難ト
 然ルヲ我乃ノ誠ニ世ニ又三草ヲ書ク人ハ有レト世ニ又三草ヲ
 知レル人ハ画シレト云ニ此兩草ヲ辨セハ知テ能セサル者ハカラ
 書テ知ラサル者ハ多カラシ是ヲ提綱ノ上ノ要文ト見レハ
 總テハ文三草ノ公論ナルレシ



滋 文 鳩



本朝文鑑才一

蓮二房 編輯

渡部和 註解

歌類

附序

天文歌

伴特記

地理歌

伴特冊

人和歌

下照姬

南朝歌

連子

誦語歌

求韻歌

題名

七種歌

字訓歌

念仰歌

長恨歌返歌

詩類

附序

四禾子 蒼鳥

獅子庵之詠

和漢者見花

和漢賞月

道遠遊

蒼鳥詩有感

秋思

十月梅

俄情徒織

山中尋酒

碓坂工支

富貴戀

所思

見月戲作

野菊

送越丸明

蠅

寫

行路難

又
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十

任云世... 古今... 序詞... 世知... 所ナ... 文鑑ノ始ニ
 歌類ヲ置テ本朝ノ二字ニ應スルヨリ暫ク世序ノ題ヲ備テ
 云ニ大和ノ意ヲ顯ハシ且ハ詩類ノ序詞アルニ對セリ備レテ
 二神ノ詞ヲ以テ和音ノ始ニ云ルヤ此故ニ其文ヲ中畧シテ
 奉朝ニ和音ヲ先トスキ證文ニ出セルナリ然レハ世序ニ先
 皇ノ諸註アリテ再ニ題意ヲ解スルニ及ハヌト世序ノ中向

二六種ニ合シ古又ハエアルレキ古又ニテトハ母以之自注ノ詞ルラ今ハ
 二六義ニ中畧アル故ニ本文ノ續トハナレリ然ルラ富士ノ烟ト長柄ノ
 橋トハ二条右京ノ両家ヨリ今古ノ説モ區々ナルラ或ハ
 ノ辨明ヲ見レハ譬々古ノ語ニ讀メル富士モ長柄ニ世ニ像アル物
 ハ變化スキニ和音ノ意ノく石易シテ人ハ心ヲ附ムキニト
 新趣ト古意トノ區別ナレハ今ハ其ノ烟モナリ其ノ橋モ
 トニイハ何モ烟ヲヨシ橋ヲヨムキトソモモ世ノ序ノ西之所ニ
 富士ノ烟ニヨリテハイニ心ヲ附ムトモイハ結語ニ時移リ古意
 トハ奈良ノ後時モ移リカハリ富士長柄ノ古意行去リ口物
 ノ變化ハ様々ナレト世ノ文字アルニハト一段ノ有尾ハ明

ナリ然ラハ諸物ノ善説アル富士ニ断不断ノ論モアラヌ長柄ニ
 造名造ノ美モアラレト我家ノ秘物ニ註トナレト但レ和音
 ノ古ノ秘授アラシニ或ハ古今ノ序傳トナラ物ニ長柄橋モ尺
 クルナリト函クト讀ゆリテ人ハイニト下ニ續クニトモ同人ト
 讀下ス(カラス其餘ハ總テ先註ニ隨フヘレ誠ニ世ノ序ノ終
 スル所ハ十流石ニナト(坑波山ニカケテ君臣父子ノ恩義ヲ
 重ニスヨリ夫婦明友ノ仁愛ヲ忍心ニ貴賤老若ノ良モラ
 思ハル本ヨリ儒仙ノ專論ニシテ本朝ニ和音ノ基本ナラカ
 ヤ是ヲ信シテ是ヲ仰クニ天地モ多ニ震動シ鬼神モ多ニ感
 仰セル實ニハ序者ノ美カト云ヘシ

補古之歌

天文奇

あふたれ。むか。あふ。あふ。

伊特評

地紀奇

あふたれ。むか。あふ。あふ。

伊特評

人紀奇

下昭報

あふたれ。むか。あふ。あふ。
あふたれ。むか。あふ。あふ。
あふたれ。むか。あふ。あふ。
あふたれ。むか。あふ。あふ。

任云此之歌古今序の類ニシテ天地ノ始ニ歌アリト云ヘル
ヨリ古注ニモ此ノ詞ヲ出セリ但し古注ハ世世之ノ自作トシ
去レハニ神ノ詞ヲ以テ和奇ノ始ト云ルモ又ハ毛詩ニ成文
ノ謂ニシテ況ヤ此ノ詞ノ之五七言ナルヤ殊ニ一五言ニ句
ニテ伊美之知ノ約ニ叶イタル神通不測ノ和奇ニ誠ニ
奉朝ノ文鑑ト知ルレ然ルニ神ノ世奇ハ文字ニ配シテハ
コナラズナリトカ世等ハ神ノ秘訣トシテ強テ註スル必
アラシキハ四維ノ折衷抄ハ反カニ其ノ山ヲ出セルヤ必モニ神ノ
詞ニ神事ノ讀ニカモ區々ナレハ今ハ古今集チノ類ニ陸ア昔ハ
漢祖ノ天風歌モ短語ニシテ正路ナルヨリ唐ニモ歌類ノ基

大月之鑑

抄類文類

七

本ト註セリ増シテ二神ノ世詞ノ短篇ニシテ正道ナルヤ世故
ニ天文地理ノ兩儀ヨリ人和ノ題ニ分シタル聖典ノ云ハ次才
ニシテ世ニラ以テ下物ノ始トハナリ次ニ古今ノ事ノ語モ世ノ
意ノ世ニ傳ヒタル下照姫ト事ヤ也ト云レハ八重ノ世ノ
殊ニ人和ノ始ナル世ニ善ク知レル所ナレハ今ハ世姫ノ事ヲ以テ人和
ノ始トハセリケリ然ルニ世ノ事ノ多ク詳シテ諸所ニ様々ノ説アリ
ト世等ハ上古ノ事ナレハ世ノ事モワキカメシト既ニ世ノ事ニ云レハ
分明ナラヌヲ神秘トスレ或ハ清輔カ奥儀抄ニ世ノ事ニ韻子
ヲ用ケタルガ彼ト世トハ文句ノ遠クアリ教子ノ世ハ求韻ノ下ニ
見レシ但シ世類ノ標題ニ補フ古ニ歌トハ文選ノ詩類ノ始ニ

モ補フ詩トハニ效ハ八重ニ三章ニ句ナルモ多ニ三章ニ七句ナルモ
神代ハ世ノ文字モ定ラズハ世故ニ之有ト云ハスレテニ歌トハ云ル
ナリ去ルハ古代ノ詞ヲ補ヒテ今世ノ事ヲ照ラスト云キ文選
ニ題註ノ意ナラン總テ日本記ノ趣ナカラ神代ノ秘説ヲ加フ

南朝ノ事

柿本人麿

やとこあやめおむすのまきくさやあやうきくさ。國
々もははあれもふ川の底よきうらへはくくると
うらみの國のむらさきあやめあやうきくさ。うら
めくさあやめあやうきくさのあやうきくさあやうきくさ

川に下りぬふささひタリとら川のをきゆり
此のいやさしかり玉の珠のいよこを
あらしむ

在云世系八万葉集ニ在リテ吉野宮ノ祝詞ナレモ君臣
ノ和合ヲ讀メリとルハ殆ニ天文地理ヨリ次ニ人知ノ世情ナレ
タニ君臣ノ合體ヲムキトナリ去レハ世系ノ全篇ハ先ニ君臣
ノ時ヲ終シ後ハ宮造リノ祝詞ナラハ心ヲ吉野ノ夜ニ寄セ
テ其ノ川ノ流ノ絶ヘケラシニ遠クノ年ノ聖化ヲ仰ヘク長ク
石ノ風雅ヲ傳ヘキトソ但シ世系ノ身四句ニ詔路ノ振子ノ
調ケレハ一字四テリんニキニヤト或抄ニ世論アリ

連系

源頼朝

ちふのいらこはくくくろよきり
いこいこいこいこいこいこい

ね云世連系ハカサト云フ舞文紙ニ寄リ頼朝ノ上洛ノ時ニ近江ノ
守山ヲ過玉フニ覆盆子成ルヲ見テ連系セヤト云キ
玉ハ平時政ハ取アス世前句ヲ申上タレトフ

詠誌

貫之娘

そよしらりしゆら啼とらやり

小端やろりまろりやろり

和云此等ハ貫之カ娘ノ九歳ニテ護タル俊頼朝臣ハ此等
吟シテ涙ヲ落シ給ヘリトテ誠ニ幼女ノ本情ヨリ出テ切者
ノ介ヲ加ヘル所トシ然ルヲ歌類ノ才ハニ置ルハ古代ノ
モ教多キカラ多シハ貫之ノ序アルヨリ彼カ娘ノ等ヲ出シテ
先ハ其父ノ重急ラ思メ次ニ位階ノ罪トテラントナリ然ラハ
此等ノ次才ヲ見テ選者三子ノ私ナク都立ノ先後ハ
ニ推ヘ知ルシ去レト誦諧ト俳諧トノ子論ハ清輔カ抄ナト
ニモ誦ハ俳字ヲ用ヘシ古今指遺ナトハむ不審ナリト云イ
芭蕉門ノ七五ヶ條ニ師資傳印ノ口訣アレト云ハ古今集

ノ故實ニ位レテ誦諧ノ子ヲ用イタル先ハ文鑑ノ公道ナク
次ニ選者ノ殊勝ト云ヘシ但シ誦諧ノノ凡躰ハ八雲所抄
ニモ論アリテ季女ノ誦諧ノ六一種ニ此抄ナリ

求韻ノ子

高市萬品抄

ろりやろりまろりやろり
あささいさささやあささい

狂云此等ハ清輔カ奥候抄ニ出シテ求韻ノ下ニ四首
去レト雜韻ノ体ナト五別マ、分明ナラス但シ通韻ノ様ヲ
見ルナリ或ハ長号ノ韻法ニ下照姫ノ号アレト是モ通韻

似テ同子ヲ用ユニ其故ヲ註セス總テ此等ノ雜法ニカキラス
其善其人ヲ論セシヨリ自己ノ志ヲ附キテ但シ本朝ニ約
子ノ少法ハ詩類ノ下ニ看合スレ

題

芭蕉庵

あこはことぬをいりてやゆくに

うれんもあはれなうもさ

ね云世号ハ祖父師ノ俳諧ニシテ此類モ數多ク中ニ多クニ
号ヲ選シル古又ハ先ニ或人ノ撰集モ此号ヲ出ストトテ
買人ヨリモ哀ナリケリト書損シタレ故云羽ノ鬼モ

ニ或クモシテ今ハ買人ヨリモト改出セルテ誠ニ物ヲ買人ノ
費人ヨリモ劣タラズ細雑魚ニ於テノ專用ナラン如何ニヤ
彼集ノ選者ノ痛骨ナル去リマ故云羽ノ俳諧ノ号ハ此外モ
アテ有ナラズ凡躰ニハ恐ル所アレバ今ハ之前ケテ誤ラ改心
ノこゝろニ世一有ラ出セルナラン

七種ノ号 五七言

東華坊

おひらやおし七種ふるくは 天の思ハのめらのくは
とらふしゆゆふのまふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

上侍朝ニ西都ノ神通ヲ云イテ仰ノ子ヲ云寄セタルカ草木モ
 我國ト悉皆成仏ノ語ヲ用イ何レカ思ノト讀メルニテラ言
 公是ヲ双角ノ法ナカラ和漢ニ筆格自在ト云ハ御形ノ錦
 トハ其ツ花ノ紅ナルヲ栞シテ錦ヲ敷嶋ト云イカケタル實モ世名
 ノテラニ偏シテ賣テハ法佛ノ教ナラト我名ノ不幸ヲ歎キ
 クルナリ或ハ繁縷ノ名ニ便リテララ袋ニ刷ラハ栞ト云ハ
 太平ノ林ナカララニ絃ト云フ御音ヲ取リ然ルニ路ト云ハ荷
 トハ琴ノ子ノマテナレト富貴實加ノ名アラヨリハ太平ノ
 物ノ勝レラ云ハりむモ起語ノ何々ヲヨリ兩所ニ教字ヲ結語
 シテ草ニ草ノ各ヲ墨タル筆端ノ鼓舞ヲ見ルキヤリ但シ

武士ノ詞ヲ墨タルハ本朝ニテ曲ノ教イアリテ先ハ詠物類ナ
 ナカラ始ニハ王家ノ學ヲ敬ラ云イ次ニ武内ノ護衛ヲ云ル
 今ニ文ニ草ノ虚實ヲモ知ルハ或ハ芥ニ陸奥トハ遠國追
 出ノ貢ニ寄セテ果シラ又東夷ニテモ譯ラ室シ茶平ヲ云ハ
 リ但シ之安達ハ芥ノ名所ナカラ彼里塚ニ鬼アリ氏君カ馬
 ニト云ハ心ナリ技木集ニ寂念ノ号アリ然ルラ若菜ノ号ニ
 云イカハ仁和希ノ号ヲ云ハル香ニハ花ノ子ノ移イヨリ花ノ子
 ニハ前草ヲ結シ鳥ノ子ニハ後草ヲ起ス是ヲ結前生後ノ
 法ニシテ兩向ノ物子ノ同キ所ニテ七種ノ各ヲ結語セリ或ハ穂ニ
 ハ石トハ農民ノ諺ニハ穂ニハ石穂ニ穂カサイト田植諺ノ

徳字ヨリホトクトハ七種ノ雜ナリ然レハ所傳ノ精本モ信御
ノ心許ニ過サラント君ノ所見素ヲ云イテアラ天ノ羽衣ノ云ヲ
借テ来ニ撰字ノ細音ナラシメハ千早振ノ詞ハ神ト云子ノ松
ナルヲ神國ノ日本ト云イカキタル等ヲ併詰ノ字格ト称スレ
然レハ日本ト唐玉ノ句ラ一拍子ニ布ヘタルハ早融木子白カキニモ
アリテ例ニ要書ノ格ト知レ結句ハ和漢ノ二鳥ヨリ多ク詩号
ノ情ヲ合セテ思好カキノ凡モ静カニ藤忠カ詩ノ波モ治リ
テ後代百歳ノ号行ナレ

字訓ノ号

秋之坊

そりれとふりりととふら。おくらあふ
くせいしりーふ。

任云云ハ炭子ヲ讀テ号書ニ註語ナト云レト今ハ約字
ヲ用ルヨリ本朝文粹ノ題ニ效イテ字訓ニ子ヲ用ユ去レハ
炭字ヲ造ラニ山從フハ字書ノ常ナカラ火字ヲ人物稱セ
タルハ字訓ノ作ノ号絶ナラシムモ寒ケハ炭コレト讀テ金城
ノ古子ト云レト但レ此坊ハ賀城外ニ直テ法花一葉ノ道心
ナリ

念佛ノ号

雲居和尚

ねんぶつ
おんが
おんが

のしほしらのく
 ぐしほく十編のまのなうてい庵の
 おもひれはしる

狂云世々八雲若念仏下尼入道ノ明暮ニ唱テ一青向ニ
 ニ子ヲ物ス惣テ一石余有アリトク然レ共和尚八真ノ松嶋
 ニ任シ愚堂大愚ト名ヲ希テ彼ハ禪内活計ヲ示レ
 此ハ經家ノ念仏ヲ勸え共ニ中比ノ各僧ナリ世故ニ殆ノ寺
 聖主未迎ノ雲色ヲ松嶋ノ海ノ夕日ニ攤ナラハ次ニ廬山ノ昔
 トハ蓮社ニ僧俗ノ交リヲ羨ミテ俊成ノ寺ノ救シテラ
 モ思ハレ誠ニ殊勝ヲ仰クヘク誠ニ以雅ラ感スヘシ

長恨歌返寄

臣部権太文推冬

い〜唐土ノ帝はう〜色とらふ〜んき〜も
 ち〜らやあふは眉〜もれ〜花のくとの〜んらにあ〜も
 月も驪山の湯あ〜も〜花を巻るれあ〜も〜よゆあ〜も
 いと端棹〜もあ〜も〜い〜更夜露の水とあ〜も〜まのた
 月にもあ〜も〜き〜も〜まのゆ〜も〜あ〜も〜い〜も
 ち〜らと〜も〜あ〜も〜き〜も〜あ〜も〜い〜も〜あ〜も〜い〜も
 月を秋ぬのあ〜も〜あ〜も〜あ〜も〜あ〜も〜あ〜も〜あ〜も
 ち〜らや瞳キラのあ〜も〜あ〜も〜あ〜も〜あ〜も〜あ〜も〜あ〜も

いたるるもえりぬせの 雲のありとをきらぬ徳り。
 ハシの汐波のそくそくぬ うきく波の玉の殿りり。
 花とりぬりし花をよそとてよ 西の田の神の化標あつと。
 雲よ花のよ海も世のきこぬ きてくもくたのあのかた。
 けりそらねまりし記念あは ぬかむさしけりかひりあ。
 名も又月のたよりかこくよ ちれきふくしおととく。
 花もあけおたよ思ふまじり 人かよ一物も神のあふに。
 けりそらぬ此國もあはりて 逢うぬの波風もあ。
 狂言世そハ四句ニ韻ニテ例ニ極韻ノ格ナリ全三冊ハ八章ニテ章毎
 四句アリ去ルハ樂天カ長恨章ニ對シテ倭國ヨリ返シテ

然ハ世ニ傳フ唐ノ揚貴妃ハ執事ノ神ノ化相ニテ今モ其所ラハ
 蓬下嶋ト云ヘリ其故ハ唐代ノ太キナル附テ日本ヲモ取ルキ心
 已ハ竊ニ神ノ計ヲ以テ唐帝ニ世ノ要ヲ知ラセ給ヘトソ或ハ
 羅浮子ノ神社考ニモ宋景濂カ日東曲ヲ引キ揚什伍ノ詞ヲ
 奉ケテ世教ラ出セルナリ
 去シハ世ノ始ニ全ク長恨章ノ歌ヲ受ケテ前ニ心ヲラヌモト
 後ニハ見ルニアカスト云ルモトノ二韻ハ其ツ合ナリ或ハ柳ノ肩ニ
 心ハ手天カ詞ヲ借テカラシムニ揚家ノ揚子ヲ云テ其母ノ揚下ニ
 姪ニカエリシ増シテニモルニ子ヲ係テカキ子ノ肩ニ取成セル是ラ
 双角ノ文法ト見ルニ直ニ其後ハ一節ノ對ヲ設ケテ其時ノ持テラ

云イ豆ノ人梳沐ラズル化鳥譽ハ二人ノ傷ニテナラフ時モ難ナル所
容ニノ霜ラニ厭フハ古クノ詞ナリ但シ驪山ハ十月ニ行幸アリテ羽
年ノ春還リ玉ハ化鳥譽ノ霜ハ其比ナルシ或ハ端棹ハ端正様
シテ華清宮ノ中ニ在リテ晝死カ化粧ノ部屋ナリト其ノ人カクテ
将衣ニ出タラシメ其答ノ水ヲ離ルニ似ナランヤ然モタラズ春暁
ノ對ハ約ヲ用ニ奇法ニメトシ次句ノ月口ヲ起セリ但シ月花ノ
ニ子ヲ云ル其地ニ其人ノ風情ナラシ其歌ハ手天カ春宵ヨリ徒ト
云フ子ニ君詩解ノ議ヲ信テ四時ノ花太者ヲ云イナトナラシ羅縵ニ
任ストハ長恨傳ノ詞ナリ但シ其歌ト云錦ハ夜ト云ル其
和漢ノ鎖辭ト云シ其歌ハ人向始終ニシテ何レカ秋ニト讀ナリ

花ハ山ノ盛衰ヲ云ク月ハ雲ノ變化ヲ云ル是ニテ馬嵬ノ露
ト消テ長恨ノ絶ル期モナレトシ其ハ春宵ノ事トナリ次句夏冬
ノ對ヲ置テ再ヒ秋ノ事ヲ以テ四序ニ轉變ノ終リト成ルモ
錦縵ノ法ナカラズ其ノ次オノ自由ヲ見レシ其歌モ長恨ノ歌ナリ
ハ三重ニハト重ト云クカケテ何カ知ラス海上ニ玉棹金鼓ノ有様
ヲ云リ然ルラ殿守ト守子ヲ云ルハ向フニ各又人ノ様ニシテ
總テハ彼等ノ縹緲ヲ云ヘリ其歌ハ世ニ傳フ其地ハ日本ノ熱田
ニテ元在トハ彼等ノ玲瓏ヲ云クニ事テハ熱子ノ縁語ナリ但シ
化粧ハ化粧ナカラズニハヒト讀ムヤ然ハ其ノ人ノ容色ヲ
思フニ實ニモ人向ノ顔ヒナラズハ其余ニ喩フル物ナレト云クテ

本朝文鑑

十一

例ニ多ク天ヲ和花一枝ヲ含メリ其次モ長恨ノ類ナラシムル也
 オレト云イカケテ又月ノ便ト作テ之ヲ結ビタルハ和漢ニ通用ノ
 法ナラシムル也一五字ノキ余波ヲ味フシ其後ハむモ結五字トシ類ハ
 唐帝ノ好色ヲ諫ルニ似テ實ハ神國ノ多可特ヲ各ニスル一篇
 ノ趣意モ世所ニシテ又五字ノ虚毎々モ世所止レシ故ニ四ノ
 国ト云フヨリヨモギ蓬カ嶋ト詔路ヲ郷言セタル和漢文法ニ子
 ノ私ナク世等ヲ之ヲ類ノ文鑑ニシテ四海太平ノ区寄ル也
 但レ世作者ハ好夏ノ社司ニテ世身ノ趣向ヲ思フ寄セシ先師ハ
 其人ノ位署ニ代リテ斯文ヲ作ル由ヲ獅子庵ノ遺稿ニハ
 存置レシカ思フニ其レハ伊勢ノ神官ナル也

詩類

古新詠詩序

渡部狂

先師カ川下武江の芭蕉庵ニありてなると
 白氏文集と云々和漢の流を尋と論とせし
 けりや唐土の流と云々に及ぶた又云々七言ハ
 い詩神ノことハ五の詔路あるよりけりて五言
 七言ありちやと云々澤喜通の通流の如く
 その詩の拍子ハちかりかりと云々多ク和歌
 の五七詠ありかりと云々又その流ありけり

海ふりおのめと拍子いれおの五七語よかふくわと
 世のい候誼も躍々説もよとていふ七の句拍子せ
 びふふおの伊呂波とて七々五のよふあん
 ちててとまるとおの流あふう一筆海の事般傳
 の趣よりい五七の語路とりて阿加薩多れ
 動と用ゆとていふの式用よりいお
 假名の語とほくりていふ七言の流格あふんや
 とおのい志よりいふとておのよとていふ
 おの五七言い真名字れおの拍子あふいおの假名
 の一よ二言あふい物の情といふかたていふとていふ

十の字と合とて七言といふとていふ又言の字あふ
 とおのいとていふとていふおの通用といふ
 あふといふといふとていふとていふとていふ
 ちていふとていふとていふとていふとていふ
 六字といふ句の伸とていふ拍子あふいおの事
 子あふといふといふとていふとていふとていふ
 の圓睚の二言や句あふい八字といふ句の意
 ともいふ一物とていふ八字の拍子あふいおの
 息とていふとていふとていふとていふとていふ
 七言の七とていふとていふとていふとていふとていふ

本朝文鑑一

十六

と子附の字面の長短及び論のあはれに於ては淹々
 流の序の詩を以てその体ありて其足跡は凡そ
 一骨ありとて一あれは詩の志也とてその字もあは
 とらりとてなれぬは平仄のあはれとてその字もあ
 韻子ありし韻字あまきとて皆く古人の先格を
 凡そそとてなれし中に一條の法度ありしは
 千變万態を以て一あれは其の遺誠とて
 其の字もこれの法格を古今とてけりしは人
 奇人の家よりなれしはこれとてその字もあは
 こととて此語のふとかりて其の御子庵に

跡とてその字もあはれしは凡の解ふとて一これ
 花より先と感して凡所の名利とおとすしは凡そ
 それ一言とておとすしは凡そその字もあはれ
 といふしはこれの和漢の月をのふとて凡そその
 口体とてその字もあはれしは凡そその字もあは
 製作の次第ありてその字もあはれしは凡そその
 近く人の間の始終とてその字もあはれしは凡そ
 と階梯のぬきとてその字もあはれしは凡そその
 子歳に於て凡そその字もあはれしは凡そその
 けりしは凡そその字もあはれしは凡そその

狂云世ニ假名ノ詩ト云フハ是ヲ本朝ノ濫解ニ是ヨリ法格ヲ定
ムル故ニ先ハ詩類ノ題下ニ付テ序ヲ置テ前ニ歌類ノ序
アリニ效ヘリ去ル獅子庵ノ遺稿ナレハ也

或ハ此序ニ白文佳ホトハ音シ白モ天カ我朝ニ来リテ
日本ニハ詩ノナキ古又ヲ嘲リタレハ住吉ノ神ノ歌ヲ以テ
和漢ノ通情ヲ示シ給ヘルカ我朝ハ争テ一奇ノミナラン
詩モ此ノ如クト云ハ又ハカリニ何トナク彼カ文佳ホラ奉テ
詩奇ノ論ニトハ云イ出セリ

或ハ天上ノ詩格トハ南海寄飯傳ノ才口ニ在リテ大子土
呵利ノ自嗟詩ニ由染便叙俗離貪還服緇如何

兩種^ハ夏^ハ我君^ハ親^ハ女兒^ハ其^ハ外^ハ龍^ハ樹^ハ馬^ハ鳴^ハ十^ハ十^ハ余^ハ卷
ノ詩賦アリ

或ハ詩經ノ之ハ五トハ先ハ其雷^ハ章^ハ有^ハ梅^ハ章^ハナト其
外^ハ之^ハ五^ハノ句^ハ拍^ハ子^ハアリテ之^ハ字^ハラモ句^ハト云イハ字^ハラモ
一句^ハト云レト二句^ハ合^ハセテ一句^ハノ意^ハナル物^ハ多^ハシ故^ハニ兼^ハテ
五七ノ語路トハ云ヘリ

或ハ漢音ニ通セストハ唐人ハ文字ヲ声ニ唱^ハ我朝ニハ
文^ハ字^ハヲ訓^ハニスレハ漢文ニ五七ノ長短アルモ何ノ拍子トモ
知^ハレヌ又昔ナリ如何ニ心得テ日本ノ詩人ハ八千里ノ外
ノ詩ヲモナフソト也

或ハ俗謡モ躍口詠モ同シ七々五ノ抑子ナガラ是カラ
 見レバ近ハカ見ユルナト此等ハ四之ノ抑子トテ和歌ニハ
 之マノ抑子ヨリニ五トモ五ニ用ル也凡雅ト俗談トノ差
 別ナトト抑子ニモ知ルキカ辟言(平生ノ俗話雜談ニ
 モ五七語ノ抑子ヲ知ルルヲ嘯^ハ上手トモ口快者トモ
 云ハ増シテ筆ヲトリ紙ニ向イテ我ハ又者ナリ^{思ハシ}ヤ
 或ハニ子ニ子アルヲモ一言トハ委ク字ト言トノ註解
 ニメテマ子ヲ合セテセヨト云イテ子ヲ合セテ五言ト
 云フ(キ其ノ所以ノ再叙ナリ辟言(九言モ八言モ物ノ抑
 子ヲ知ラシ人ハ總テ呂律ニ合ハス(キラ五七ノ語路ト定^{タル}

抑子ヲ知ラヌ人ノ捉テラシ故ニ和歌ノ字アリヲ引テ詩經
 ヲ證文ニ出セルナリ去レハ詩經ノ卷頭ニ爾々^ル唯鳩在河
 之洲トハ一句ノ意ヲ二句ト云レハ本朝ノ詩ニモ二句ヲ一
 句ニシテ子ヲ一言ト云(キハ十バ子ヲ合セテセ言^{ナリ}
 ト根本ノ詩經ヲ鑑^ニノ一字一句ノ私ナキ是ヲ古人ノ
 先格ニヨリテ一條ノ法度ト云フナル(誠ニ五七ノ抑子
 ノミ詩經ノ先達モ論セオラシハ(言ニ本朝文鑑ノ
 面皮トス(キハ此論ナリ
 或ハ約字平仄ナト總テ古人ノ法格ヲ破ラズ糖^フ所ノ
 異ラシハ増シテ本朝ノ手柄ト云レシ次ニ律詩ノ法トテ

總テ作者ノ文覺ラ以テ永ク假名ノ詩ノ凡体ヲ起サハ
 今且ノ人ハ明日ノ師トナリ明日ノ詩ハ百世ノ文鑑タラシ
 去レハ本朝ノ詩ノ元祖タラシハ先ハ詩ノノ擬古ヲ
 子ヒテ古詩ノ凡体ニ效ヘルヨリ次ニハ和漢ノ通情ヲ
 アラシメテ後世ノ詩人ニ東坡山谷カ風ヲ慕ヒ本朝ノ文者
 ニハ菅家源順ノ各ヲ思ハサラシヤ然モ江淹ノ序詞
 ヲモ引テカラ古人ノ法格ヲ見合セテトハ和漢通用ノ
 論ニ一時流行ノ備トモ云フレ但此序ハ先師遺
 稿ナラ暫ク白狂カ名ニ寄セテ實ニ其言ヲ傳レハ
 結語ハ蹈ノ一字ヲ以テ序者ノ誠恐誠惶ト見ルレシ

本朝文鑑

三

擬古二詩

四季花鳥 五言

花

君不見春也春と秋と。 花はけいふおのり。
 葉はしらけはくはくはく。 心もあはれいこる。

鳥

夏あけくまはら。 心もあはれいこる。
 世は河うくはくはく。 心もあはれいこる。
 ね云花ノ三早ハ名利ノ感ナリ去レハ人間命ニ在リテ

本朝文鑑

三

和歌ハ世ノ凡俗ナルヲ知り各歌ハ千歳ノ君子ナルヲ
 見レハ和葉ハ兔モ角モ掃キスツキニ各花ハ今ヲ惚乱
 スト云む落葉ノ口をラ合メタル語急サラニ分明
 たり然レハ其ノ葉ヲ和ニ喩ヘ其ノ花ヲ名ニ喩チテ葉ニ
 ハ酒色ノ兩歌ナト花ニ喩フルハ的面ナラン或ハ之ノ
 句ニ至リテ花ニ葉ノニ字ヲ重子タル或ハ累語ノ格
 モ似タレト是ハ本注ノ法ニテ古詩ノ体ニハけ格アリ或ハ
 君有ノニ字ハ歌行ノ常語ニテ世間一等ノ人ヲ指ス詞
 ナリ或ハ花ニ惚ムトハ江上被レ花惚カナト杜公ト詩ノ
 詞ヨリ静心ナク花ハ散ラントモ絶ヘテ櫻ノナカリセハ

トモ詩奇ノ人ノ情ヲ汲ミテ花ニ和ルル歎息ナリ然レハ
 標題ニ擬古ニ詩ト云ル前ニ歌麴ノ之歌ニ效フテ之ニ
 ニ詩トハ題マシナリ花モ此詩ハラコトノ韻ヲ用ユ叶韻ハ
 總テ之ニ效フレ但シ花仙ハ先師ノ詩号ナリ
 和云鳥ノ一章ハ衣食住ノ感ナリ去レハ人間ノ世ニ在リ
 テハ寒暑ノ往來ニ苦ホアリテ富貴貧賤モ其レニ
 随フ古又ナリ然ルヲ我身ニ感スレハ衣ハ行先ノ有ルニ
 随フク食ハ行先ノ饗モテ任セ住ハ行先ノ留ルニ遊フ去レ
 ト此レニ苦ホ交ハリテ野山ノ鳥ニモ似サラン然レハ
 假リノ世ノ苦ホヲ認リテ憂ヒツラレトハ如何ニ思ハヤ

我ハ往還ユキ古巢アリト鳥ヲ愚ニ身ニ喩ヘテ自向
 自答ノ詞ヨリ應無所任ノ心ヲ示スルナリ増シテ
 知花ニ鳥ヲ云ヘル嘗ノ鳥ヲ己カ家ニノ例ニ時鳥ホトキスノ往
 還ル急ナラン本ヨリ先師ノ記モ云ヘル天下ニ幾シクニ處ノ
 獅子ニ庵アリテト古巢ハ飯野ノ田地ナリ去トハ花鳥ノ詩
 ノ四本ヲ云イテカラ多ニ知花ノ其ノ云ヘル似テホカ及ニ
 往還ト云フ詞ノ鎖ニ知花ノ雪ト云イカケタル其ト冬
 トラ離々閑シテ是ヲ隱見ノ法ト云フ也此等ハ新朝ノ風流
 ニソ唐國ノ詩人ヲモ欺クアサムキ所ナリ誠ニ其ノ妙ナルヘク
 妙ニノ神助アリト云ハシ正ニ本朝ノ詩ノ卷頭タラニ此等

ノ教誡ニ花鳥ノ情ヲ顯テ家ニ條ノ道ナカラシヤ近ク
 此詩ヲ学ヘテ遠ク其人ヲ嘲ルヘカク、

獅子庵ノ詠 七言

本心老臣

松

松とあそべハ松も森らむ。 我とひいれおとそをりし。
 吾のやうに月のおとそ 竹のあそびをたのむ。

茶

梅をいじりて清くまじ。 茶のいじりて軟くまじ。
 ぬるらひのふれはとす。 豆のあそびはたのむ。

い

望とくふあは性ふれど。 利体の家の教養もあつとど
然く凡雅の旅とあはれとく 此のゆゑふよりゆゑんせむ。

和云松ノ一章ハ明友ノ趣向ヨリ藤、毎凡カ松ヲ讀テ
松ヲ昔ノ友ト云イ一昔子歎カ竹ヲ愛ソ竹ヲ此君ト云
元和漢ノ風流ヲ取合セテ詩意ノ通情ヲアラハセリ況ヤ
松竹の名ヲ類シテ松ニ公、字ノ所以アルヤ或ハ松露覺
トハ和音ノ詞ノ系ヲカケニテ松ニ根、字ノ鎖辭ナラン或ハ
雪ノ日二月ノ夜トハ松二月雪ノ形容ヲ附ケテ字面ハ
四時ヲ含メタリ 誠ニ此堂ノ友ヲ思ハシハ曉ノ露覺ノ寂

ナラシ三遊ノ子ハ莊子ロ筋骨アリテ逍遥ノ筆カニモ
歎スヘク凡雅ノ畫情ヲ尽セリト云フヘシ

和云茶ノ一章ハ俳諧ノ趣向ヨリ和漢ノ詩意ヲ取合
テ楚辭ハタミクナハ梅ヲモ忘レケン何トテ朝夕ニ歌フ
吾ニ讀レヌハ茶ノ遺恨ナラン去レト我家ノ俳諧ハ詩
歌ニ肩ヲ双ヘカタク前次豆ノ會ニ吾ラ注ラント例ニ
虚實ノ文法ヨリ例ニ俳諧ノ筆格ナリ去レハ凡雅ノ上
ノ揖讓ヲ以テノ名席茶ノ飽体ヲ見ルキナリ

和云公五ノ一章ハ教音者ノ趣向ヨリ凡雅人ニ敵對セリ
所謂ル法性寺筵ハ洛外ノ名物ニソ竹ノ皮ヲ以テ造ル

カ多クハ昔人ノ燈次ハ立ニ用ユケ故ニ利体ノ各ヲ借テ
隱者ノ風流ヲ中ニモ風雅ハ旅行ノ鑄^{カビ}アラユヘリ
花ノ芳野トハ庚午紀行ニ「芳野ニテ櫻見セウヲ梅^木立
ト云ル先^云爾ノ和句アリテ蕉^内ノ人ノ常談ナレハ本朝ノ
詩ヲ思イ立テ其祖ノ遺詔ヲ傳ヘサランヤ爰ニ計^公立
骨^公節ト見ルレ總テハ俳諧ノ和實ヲ云ルニ座^文ノ法ヲ知
^{手也}

和漢賞花^ヲ 五言律

花^イ一^ちあ^うく　　人^ちあ^うくも。
わ^んん^の蝶^社あり　　は^くく^のあ^らま^らふ。

さ^あら^さと^敷は^らき　　さ^あら^さと^後は^らる。
唐^ノし^のさ^の方^はあ^らい　　は^くく^のあ^らま^らふ。

和漢賞花^ヲ 七言律

我^のり^のと^れる^月の^おら　　は^くく^のあ^らま^らふ。
清^くは^らの^の玉^とと^うき　　は^くく^のあ^らま^らふ。
雪^くの^陰の^なと^りん　　は^くく^のあ^らま^らふ。
は^くく^のあ^らま^らふ　　は^くく^のあ^らま^らふ。
ね^云花^ノ詩^ハ和^奇ノ^体ニ^効イ^テ全^ク風^情ヲ^成セ^リト
云^フレ^去レ^ハ弟^一弟^一弟^一ノ^句ハ^世ニ^人ノ^花ヲ^昔ス^ル唐^土ノ^人

ハ牡丹ヲ云イ、和朝ノ人ハ櫻ヲ云テ其趣ハ異ナレトモ
 其意ハ同シキトナリ次ニ後對ノ鼓ニ咲トハ唐玄宗
 ノ遊車ニノ時ナラ子トモ花ノ咲タルヨシ羯鼓樓ニ則ノ
 詩ノ意ヲ借り用イ、鐘ニ敲ルハ可ノ詞ナレハ又ニモ
 和漢ノ情ヲ對シ殊ニ哀ホノ二相ヲ云ハル西ノ鴻カ鳥
 僧ノ對ト云フトモ花會々ラ尺ナル所アラシカ或ハ唐
 ニ在リ野トハ古今佳事ノ俳諧ニ寄ラ借ツテ才ニハ和漢ノ
 題名ヲ結シ才ニハ詩ノ通情ヲ顯ス又ニ起結
 並微ヲ味フレシ去レハ五言ノ詩ハ本朝ニ陵ヨリ起リテ本朝ニ終ル龍
 カ評ニモ云ハル此等ノ次才ハ選者ノ心得ナカラ本朝ニ詩格

ヲ定ムキ作者ノ粉骨ヲ知ルキナリ
 和云月ノ詩ハ俳諧ノ体ニ效ヒテ全ク虚誑ヲ尽セリト
 云ハレ去ルハ和漢ニ月花ヲ兼レテ本朝ニ詩格ヲ定
 ムキニ才ハ和朝ノ和奇ノ凡体ニ效イ、才ニハ和宗ニ俳諧
 ノ筆格ヲ立ツレシ彼ニ五言律ト云イ此ニ七言律ト云
 へル題ノ次才ハハハ謂ナリ去レハ才ニ才ニ句ハ金源シカ
 禁止ノ詞ヲ借りテ安仲磨カ飯野ノ吟ニ寄ス先ハ
 和朝ノ詠辭ソト見ルレシ次ニ前對ハ詩ノ奇ノ詞ヲ
 ナラテ微瀾卧王塔トモ糸女波金不定トモ昔ニ
 古詩ノ姿ヲ寫シ月ノ桂ノ實ヤハナル光リヲ花

ハカリニト讀タル古歌ノ情ヲ合セタリ次ニ後對ハ子歎
カ故吏ニ寄セテ雪ニ山陰ノ夜ヲ憶フトハ夜雪初晴
月色清明ト云ルハ字ノ意ヲ借リ用ニ然ラハ露モ
更科ト云ルモ露ヲ晒スト云イカケテ共ニ天ノ皎潔
ヲ露ト露トニ形容セリ也ヨリ會秘ノ山陰ヲ云ハ
ヤカケト訓テ更科ニ對シタル和漢ニ不思議ノ各所
ナフニカ増シテ夜ノ字モ婉ノ字モ和漢ニ月下ノ句情
ニ千里外ノ詩ヲ合メノ厨メカ子ツノ歌ヲ合ハス此等
托物比魚ノ体ト知レシ然レハ結句ハ一ニノ趣ヲ結ヒ唐
ノ詩人ハ旅霏ノ月ヲ思フ故郷ノ妻ヲ思フ佳ル

我朝ノ各月ハ辛ト請世三月ヲ詠メテ危様ノ物思イモ
アラストハ辛ト妹トノ御音ヲ云ル此等ヲ倭語ノ自在
ヨリニ無心所着ノ体ナカラ俳諧ノ文法モ多クナルハ
本朝ノ詩格モ多クナルレ或ハサハトハ任他ニ危様
ノ畧語ナレハ是ラモ和漢ノ通詞ナラシ或ハ別ニ危様
後ニ物ヲ思ハスト云ル同字ノ差別モ多クニ效フヘシ

道遙遊

五言

蓮二片

いあいのをよれ中に。 五情れハ我はしれり。
きらーとよあや かく獲て以味なり。

紀云詩ハ亭ニ裴翠ノ眸ハ掛物ノ賛ナルヲ今ハ遺途遊
ノ之字ヲ題シテ凡雅ノ是非ヲ掃却ス尤モ其鳥ノ瘦
生爾ナル詩ノ意モ見ワシシ然レハ人向ノ好西ノ中ニ
霖レハ我ヲ鳥覺レハ鳥為我ト云ル在子ア齊物
ノ意ナラフ句法ニ騎線ノ自在ヲ見ルシ或ハ鳥美ハ
世間ノ人ヲ指シ仰象ニ人ノ賤弱ニ任セ儒門ニ相難如何ニ
意ナレハ我世情ノ味ニ尽キテ凡雅ノ優劣貶ニ心ナレト也但
鳥美ハ前ノ鳥ヲ重子テ是ヲ累字ノ格ト見ルシ

飛花老仙花鳥詩有感

五七言

澹郊狂

ひし。いふありの人のくむく。
今も。もも。の。ふのこは。えぬ。
は。さ。あ。い。も。や。ら。く。て。ふ。
我。も。も。も。も。も。も。も。も。も。も。

紀云詩ハ先師ノ之田忌ニ重並別ノ追憶ナリ去ル季子自
ク五七言ニ效ヘリ季子自憶友詩ニ秋風清。秋月明。
落葉重。四散。寒鴉極。復。致。思。相。見。知。
何。日。此。地。夜。難。為。情。トアリ然レ其詩ハ六句ナレ
秋風ノ句ハ落葉ヲ起シ秋月ノ句ハ寒鴉ヲ起シテ
其詩ハ六句ニテ四句ノ意ナレハ此詩ハ十二句ニテ四句ノ

意ナラン然ラハニ子ヲ一言ト云イテナ子トナマ子ヲ一句ルモ
 兼用ハ多ク同シカレト云ト其詩ハ七々五々セト云
 一タルニ假名ニシタト云フ付ハ意アリテ詞タラス是
 長短ノ句ハニモ似タレト其レハ其句ノ置所ヲ定テハ
 別ニ長短ノ詩格ハ有レシ此等ノ法格ハ千差万別ナリ
 何カハ我朝ノ假名ヲ以テ漢家ノ真名ニカレヤナリ
 去ルハ花鳥ノ二字ニ詩格ヲ起シ今ハ花鳥ノ感ニ詩格ヲ
 結シテ漢ニホ子方白ハエケセテノ韻ヲ用イ倭ニ渡白狂
 ハラクスフノ韻ヲ踏ム一字二点ノ私ナラシハ若ヤ七師ノ
 遺命ヲ傳ヘテ世ニ計一格モ有ラシカ也

秋思

僧自如

尾上の藤の秋と云れよ 耳のふらふら老のなるを
 けらのふらふらと云れよ ありのおもひと云のむらも
 狂云世詩ハ眼前ノ秋情ヨリ我身ノ老ヲ感シタル徒然ナリ
 四季ノ改ニモ世ノ律モタラヌ身モ空ノ各残ノ惜キト云ル
 光陰空過ノ嘆息ナリ然レハ我身ノ紅子也ノ色ヲ春花トモ
 詠ムハ四季ノ風推ラヌニホントナリ況ヤ明日ヲ待テハ
 天ニ風雨ノ変化ヲ云イ人ニ死生ノ無常ヲ云リ或ハ紅葉ヲ
 ナ花ト云ル杜牧カ山行ノ詩ヲ借テ世ニ草ノ將トナセリ但シ世老
 ハ濃山縣ニノ之輪ノ山下ニ南居ス何雅ニ云宿ノ傍アリ云レ

十月梅

二所堂

花とびりて幸府さしぬ ほとと仲のあさるまゝん
 ちあひしは只あゝいふれ 一字の節も思ふことね
 狂言詩の隠見は法に全き無梅字ラハスむも一六天神歌詠
 ナカウ咲や世花に梅ノ夏ニノ腰向ハ石依ノ丹葉ヲ思フ落向ハ府已
 P早梅ニ言セテ寺子ニ言ヌ又ラ勸ケル總テ留守ニ言ラテスレ

俄憎促織ヲ古詩三章

宮六人

其二

ちいあひしきいふかき ほとと仲のあさるまゝん
 けいそこの長刀のあさる 柳あひあひてあさるまゝん

其二

ちいあひしきいふかき ほとと仲のあさるまゝん
 ちあひしきいふかき ほとと仲のあさるまゝん

其二

けいそこの長刀のあさる 柳あひあひてあさるまゝん
 けいそこの長刀のあさる 柳あひあひてあさるまゝん
 狂言詩の隠見は法に全き無梅字ラハスむも一六天神歌詠
 ナカウ咲や世花に梅ノ夏ニノ腰向ハ石依ノ丹葉ヲ思フ落向ハ府已
 P早梅ニ言セテ寺子ニ言ヌ又ラ勸ケル總テ留守ニ言ラテスレ
 俄憎促織ヲ古詩三章
 宮六人

畫堂ヲ移スレ其ハ遠まニ氣色ヲ廣シ胸向ニ田登字ノ格ヲ
 用イ野句ニ田登語ノ格ヲ用エモ和ニ漢ナレ其ハ詩ノ染
 フ飾リテ花ニ心ト云ルヨリ小蝶ノニ子ヲ思イ言セタ況ヤ促織
 ノ手利ナカラ蝶初ノ模様ニモ方タルハト責テハ彼レニ恥ヤセ
 僧ノ子ニ情アリテ凡雅僧愛ハ世誑ナレ但シ作者ハ宮田中ニ
 濃ノ山縣ニ素生ス常ハ事ニ在ニ幽遊シテ向ラ高即師ト稱セリ

山中尋師

得巴

門の松よよほときらわれ 畚めりたてまふ前ふら
 行とけれなく底に痛まて 向り音のなごらひ

社云此詩作者ハ故アリテ美濃ノ山里ヲ廻ルニ山道ノ艱難ヨリ

申家ノ不自由ヲ云ナリ去ハ畚振ト云フ古又ハ擔賣ノハ高今
 云レ其國ノ俗談ナリ惣テハ山家ノ形容ニハ思ノ情ヲ入セリ
 上云レ但シ作者ハ得能キヲ越ノ福モ住ス東華少古乃人ナリ

碓坂土支

并序

石伴兔

外ら市中の商人もほろとけりとも 市中此處者
 ことばわかれ之國の市もわたりて 掃土の義とを
 ことばわかれのつらさりの心とや 中らけり
 雨遊の真もあはれとて 津庵の障子のやと雲
 たりてたふさの向と移りて けりてあはれに

ありふるともむねおののそとけし涼菟へ裸妻の
 おきありしとふれいふと所坊へつと
 あつ竹世作よ世果くと飲し

何とからのぬれあつて 何とあつて合とく
 何と風折のさいとあつて 人々さるのねさつて

和云此詩ハユマニヨラズルニ止ルハ以雅ノ温知ヨリ人我ノ境ヲ
 観スルニ其確ノ如クナラシニ誰カハセノ鑄ヲ知ラテトナリ葛ノ
 松原ハ撰集物ニ在リテ人ニハ屑ト教ナラヌ身ヲ云ヘリをモ
 序文ノ松原ヨリ其地ノ角寂ラヌナラ暗ニニ祖ノ悟所ニニ値シ
 伯免ハ石川氏ニ先師ニ遺教ノ人ナリ因所ハ辨類ニ出タリ

寄書

石道角

望し越後のちをぬここけし 口ねんと思をさむむか
 あつあつしとふれいふと 何とあつて合とく
 人々さるのねさつて 人々さるのねさつて
 ありふるともむねおののそとけし 涼菟へ裸妻の
 おきありしとふれいふと 所坊へつと
 あつ竹世作よ世果くと飲し

和云此詩ハ所題ニ致シテ逢テ逢テ思ハルニ對シ思ハルニ
 云イ後對ハ昔言フ詞ニ思可ノ臂ヲ云イ子蘇ヤ形ヲ云イナリ
 何トノ相見ニトナリ去レト月影ニ其書ヲ見ハルニ思ハルニ對シ思ハルニ
 行ハクモアラスト思ハルニ子ハ子蘇カ詞ヲ又ケタルナリを断斷目ヲ
 和イテ立明ストハ傳又奇絶ナリ作者ハ越ノ直江津ニ住スる塚氏ノ凡人也

所思

文石

しーらねよぬしをてあな
 うららるるあのみせとあけ
 りあしぬのあなふりや
 人のうららねあもろくあ
 ね云世詩ハ杜陵カ題ラ備テ人向ノ是非ヲ嘆息セシニ先皇皇子
 カ悲系ノミヨリ前後ハ無心所着ラ世路ノ區々タル云ルナラン
 但シ作者ハ甲陽事内トウ過角書傳テ姓名ヲ録セス

見月戲作

各東羽

誰くもしや天体とてまは
 月のまよふかたのよ
 うつ男のあつらふか
 うららるるあのみせとあけ

狂云世詩ハ哀郊カ月詩ヲ備テ天津乙女ハ嫦娥カ而云

ラ云り我ハ月宮ラ月都ト云ル詩云ニ多ク用ヒ来レリ然レハ
 世ニ云フ桂田ノイワレカ月宮ノ乙女ニ通イテ今昔ハ甲子ノ
 名ニ逢ルハ月十五夜ノ日出度サト題ニ戲ノ子ラ云ルモ
 俳諧ノ筆格トムレ但シ作者ハ濃ノ北野ニ任ス各者ハ凡テナリ

野系

江北信

秋のふれらるるのせや
 秋のふれらるるのせや
 狂云世詩ハ首尾ノ吟ニ和漢ニ格ヲ用ケ来レリ去ル人向ノ
 菊花ヲ思ハ秋ノ花野ノ色々ナレ中ニ誰モ我ハト思イ群
 タララ野系ハ花ノ角素ナレ誠ニ凡雅ノ錯ニテ作者喻ハ

ハ身止上レ但シ老ハ濃ノ如納ニ産ニテ穉ニ生山ノ群ニ嘉適ス
或ハ萃ヲ好ミ以雅ニ遊レ能田舎ノ老豈ナリ

送越老明三五七言

渡吾仲

ニハ一神の心此る多しあつて
いへば一川の流もはくさね
今もわが心をかきとちりて
くと秋のゆくえをわがせ

我云世詩ハ字面ノ依チカラ拙花ト松音トニ寄セテ夏来テ
秋帰ル意ヲ云ルをモ別恨ノ風情ヲ尽セリ但シ老明ハ
我ノ直江津ノ僧ニシテ蕉門ノ風雅ニ遊リトス

蠅

岩脈裏

蠅とちりし能く心する
病とちりし能く心する
あつたのちりし能く心する
あつたのちりし能く心する

狂云世詩ハ歌ノ増鐘ヨリむ毛和屋ノ情ヲ云スニ前對ハ虚ヲ後
對ハ實ナルを互言律ノ風格ヲ知レ況ヤ秋風ノ便アスト社音ノ
風情ヲ附ヤラフ宜キ味ニ似諾ノ筆格凡誠ニ假名ノ詩鑑ト云フ

鴛

伊東恕

誰々そととくやまけらん
竹よあせむつ橋よあせむつ

けしきをよしの里に啼くは くるりのいねるゑをよ
 狂云此詩ハ嘗ノ染情ヲ尽セリト云レ然レニ嘗ハ雨ヲ喜ム鳥ナリトテ
 和訓モ雨喜鳥ト云リトフ望縫ハ右等ノ各所ナカラサモ依
 モ嘗ノ喜ナリ但レ作者ハ秋ノ寂寥ニ任ス伴吹ギノ俳ナリ

行路難

渡右の靴

年よ故あり園よ新しき 早の光も金もふよりね
 柳を松よあるもふりね 中よれ長者の歸をすや
 今よ故ありはに新しき 町をれふれをのふりね
 津のねも腰もきりね 入りのやれもふりね
 思ふまじや我々の故よ 若松のりの馬もふりね

きくくハ後弦の鞞テケルもあふも きくくハ一筋の念佛ニウもあふも

狂云此詩ハ二句ヲ三節ナリ去ハ樂天カ行路難ヨリ人間ニ等ク故
 フ云ル其ハ師走ノ故トハ月星を光ク金銀ハハス人間ノ賤路ハ
 去ナルニ我ハ世向ノ沙汰ヲ通テ花ニ分限者ノ歸擣ノ切ナリ但
 枕元、耶那ノ栄花ヲ云テ真野ハ長者ノ通行ナリ其ハ人間
 ノ西洞ヨリ作者モ此年ハ初老ノ會トシ 總ラハ野七里ノクシ山七里ヤマシニ光故ノ
 草臥ラレシニ其ハ人間ノ大夏ニ具連ノ以テ我ス時ハ高車馬
 ノカミ及ス金印等後ノ位ニモ寄ラズ一念一唱ノ言ヲ以テ還ニ往
 スキトナリ去ルハ白居易カ君ノよヲ備テハ官絃ノ任事ハ去テ付ヨリ
 君王ハ幅ヲテ富貴ノ人ヲ駭馬シテ事ヲ去テ言ハシ誠ニ和漢

ノ法アリテ世等ヲ長篇ノ鑑トスレ但シ作者ハ渡部氏ニシテ師ニ世ノ
稿子ナリ常ハ黄山ニ世ヲ適シテ連ニ居トテ其ニ私耕セリ

韻叶

ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	ニ	ヤ	ラ	ワ
イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	コ	シ	井	リ
ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ル	ウ
エ	ケ	セ	テ	子	ヘ	メ	エ	レ	エ
ヲ	コ	ツ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	コ	オ



